KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

水滸後伝国語 二

ル 3
3279
4

木曾路名所圖會卷之三

目錄

○落合
霧原山
幕本
皂鵰巖
丸山城跡
岐阻路山中
光德寺
兜巖
○三富野
羅天橋
牛頭天王
劔宮
十曲嶺
薗原
藁倉街道
瀧訪祠
木曾川
大妻瀧
鯉巖
古木名岳
牧澤橋
奈良嶽嶽
白山權現
等覺寺
義信國墺
伏屋邑
○馬籠
永昌寺
○妻瀧
牛頭天王
烏帽子巖
捻樹澤
横川戸橋
揚籠山
若宮祠
觀音堂
落合橋
御坂古蹟
兼好法師跡
下坂川
吉蘇路
雄雄瀑布
妻籠古城
風越山
園原先生碑
伊勢山
住吉祠
鮎野權現

3279
4

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

岩戸親音
○野尻
鹿島祠
妙覺寺
長野
貴布祢祠
阿満橋
淨勝寺
小野滝
獣類皮店
鹿嶋祠
本曽桟道跡
木曽川
興善寺
名產和合酒
飯盛山
白山権現
野尻家
今井兼平城
出雲祠
怒出親吉
本堂 左京太夫親豊墓
狐免川橋
観音堂
神明
御嶽川
御室
鐘楼 義仲墓
本堂 愛宕祠
○須原
十王堂 鐘楼同鐘銘
隔川寺
阿弥陀堂
三飯迴翁閑居
○上松
三富聖邸
本曽大河
任右祠
本戸致春家
木曽殿館
天長院
木曽古道
牛頭天王
諏方祠
聖尻城山
弓矢八幡
雑賊天森
伊奈川橋
奈良祠
寝覚床
氣比祠
御嶽鳥居
福島関陰
長福寺
○福島
稲荷祠

義康古城
名產 駒 河蕨
椎守兼遠家
野婦池
○宮腰
木曽義仲城
山吹山
義仲手洗水
薮原宅
名製表 掃
頼明神祠
長泉寺
名造諸器
櫻澤橋
門家譜
赤魚
沢殿
矸犬岩
正八幡宮
梅に次郎兼光館
荻曽川
○藪原
五反田橋
鳥居嶺
綱懸嶺
奈良井義高家
諏方祠
塾川
木曽義昌家譜
名制表 蕨蓄 凍餅
水精山
軒蛇潭
南宮祠
今井四郎兼平城
往還橋
熊聖権現
巣鷹宮舎
義仲硯水
奈良井橋
千村重照宅
平澤
構本澤
凍豆腐 諸薬種 諸器物
烽火嶺
明星巖
德音寺
巴御前兼蹟
德音寺橋
極楽寺
土產 駒 蕃蕷
○奈良井
大寶寺
土產 押栗 蕎麦
○塾川驛
諏方祠

本曾路名所図會巻之三目録終

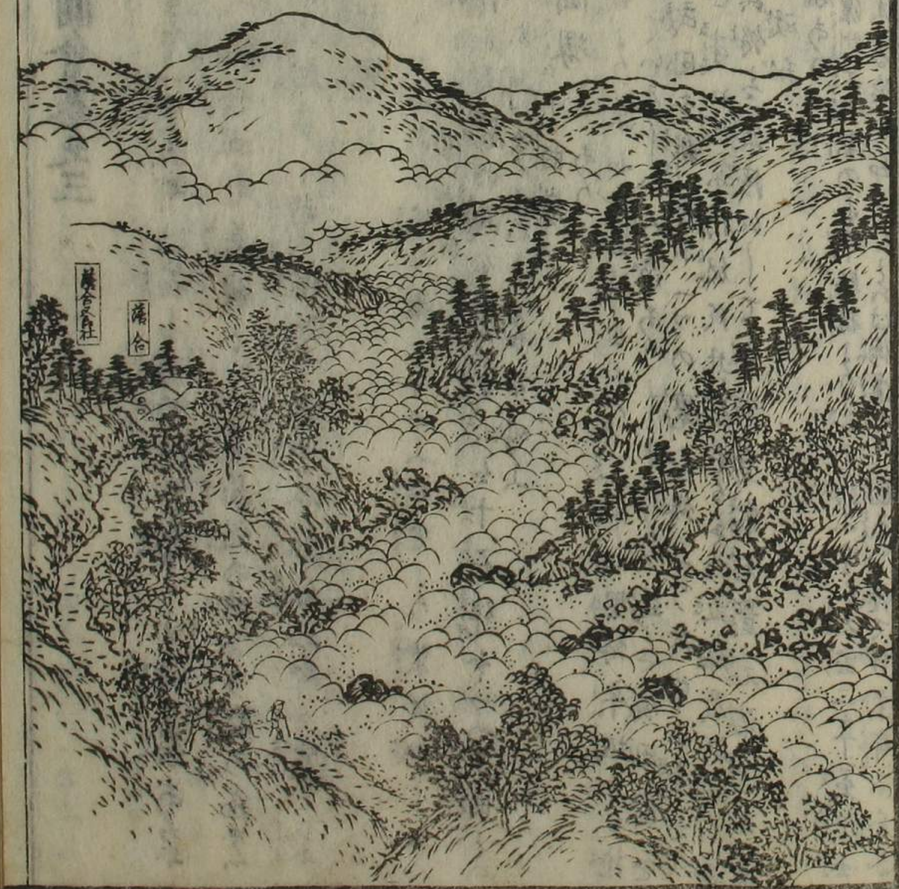
観音寺　鷲峯寺　押竜橋
千村伝政家　萩曽　諸獸　鹿猪羊熊
五月日橋　長更菊洞　奈川
黒川温泉　山神祠　駕籠坂嶺
無尾山　烽火墓　小子墳
西野　黒澤　御嶽権現　鹿熊皮山神祠子
氷滿園道　土産　十二島猪鹿羊　崩越古城
木曾殿墓　兼遠墓
○本山　○洗馬
長光寺乃　犬飼清水
○塩尻　洗間洞
塩尻嶺　桔梗原　義仲馬洗水
阿禮神社
大岩
熱川四月宅　土産　絲綿麻　接骨藥
秀綱澤　焼棚山
地獄澤　御嶽山
岩戸権現
三浦山

落合橋

十曲嶺ヨリ

美信二州の

國界ヲ



木曾路名所圖會卷之三

落合（美濃 信濃）

馬籠まで一里五町は宿も若干炮を製して渡る家あり

いろ〳〵の落合五郎兼能とゝ者居住の地なり駅の西南方ふ杉の大樹多くある林なり其中ふ落合五郎が霊を祭祠あり山宿賑〳〵

落合橋　宿の入口ふあり釜が橋ともゝ双方より栗茂出し〳〵

十曲嶺　宿ふあり里人ゝ十石作りゝ十曲といふ坂路なり馬籠の間ふあり

美濃信濃國境　十曲嶺ふあり

霧原山　落合より東ふ二里許ふあり山中一里餘平坦なる地ひゝく〳〵民田を耕ひ人家あり〳〵と迎ゝ濱田園を千載義むすいに氏ふ一ツの甕を得ゝ其中ふ銭七八貫あり其餘ゝ宋銭にして古平皇宋元豊元祐崇熙元通嘉定大観政和ふの文字あり

御坂山古道　濃州大井駅の小千駄林より本谷路ふ入る大宝二年美濃国本谷路を切ひらく古山街道なり国府を経て伊奈郡ふ出る

萬葉　知波夜布留賀美乃美佐賀爾怒佐麻都里
伊波員伊能知波意毛知知我多米　壬帳埴科郡神人部子忍男

後拾遺　ちゝ雲のうへゝ見ゆるあゝ引の山れ言根ふ坂なるゝ葉　能因法師

夫木　信濃なる冬の坂ゝ登へうゝ見れく本谷の坂ふ紅葉ゝふるわ　衣笠内大臣

續後撰　去かれちや本谷の坂ふ小篠原分り袖もかくや露乃紅　権中納言長房

新千　谷風ふ雲こ登のれ信濃路やゝ登れ坂乃夕立先ふ　千惠法師

古事紀　日本武尊、條曰、越科野、國言向科野之坂神而還來尾張國云云

景行紀　倭武尊信濃ゝ登へ濃へ出ゝて大坂の坂を越ゝ紀食於山中山の神自化麻と成ゝ沛茅ふ立てたゝ倒れ臥ふあゝて倒れ穂ゝ栗信濃坂を越る手の杖ふく神ふ氣ふ向ゝ煩ひゝる山附ゝ浸蒜を爵ゝ人乃び牛馬ふ塗ゝ
おのぼゝ神の氣ふあゝ人乃至又曰ゝ山中に道を失ひゝ人ふ

源氏物語

白狗導を乞状ありて英流水出ずと云く

宇治拾遺

今いまゝ信濃守藤原陳忠朝臣ありけるに陳忠は石比多の嬉武智麿の四男巨勢麿の後ふて大納言元方の二男なり正五位任国畢てのぼり上りける水沛坂を越る間水多くの馬伝下信濃守小住ぜり

なほ前を急く人の乗たる中に守の乗たる馬と桟橋の強き木を後足にて踏折て守逆さまに水馬より乗ぶて落入ぬ底さいく

ぐくもたゞ流れ守生くあるくもなし　中略　守の叫びて泡

ふ言遠く遠く聞ゆれば其宮ふるゆ穴孫何度を富ふど聞く也

云へば強義水縄長く法あて下せと宮ふあり独れば守生て物ふ留

まて沛まるなりけるもと知く強義ふ多くの人は差縄どもを寄集て

結びて結結くられくと下しに　中略　守強義水乗て彼結よてう

と云云　皇朝七十代の後冷泉院の時の人大蔵連を召て桟橋はむし

の橋のごとく水を架て是と義蔓水て編道の狭きと所を谷水

方へ水を架て是と義蔓水て編道の狭きと補ふる所多し

薗原　今の御代乃ち水の道あり古道あり小盤川の奥

なる苔の原村くに宗祇のいをゆる英流の伝流の国堺ふありとい

これより一説水の真田のれく水ありて十の系

なりと今ゝ代のもゝ也よりと北

金葉　もゝきけれ梢やいかてれかれこそれの系ふ系ふ系ふ系ふ

新古　そはそゝや伏屋水生るもゝ系ふ系ふ系ふ系ふ

後拾遺　ゆゝて年をあれもはゝ先帝本の乃世はゝ高津まする

伏屋里　薗原の中にある田屋をいふ先をありて坂のもく

を広水呼ぶてもゝ上ゝ下ゝもゝ伝流水の先帝坂のもく

或云　続ぶ小家なり雪のた先ゝ廣聖を間水ひゝき

其地より仮ぶ山の下ゝ家成造りもく入ぶい冠のゝ小彩

と引て伏屋ゝ物の伏ゝ或云張江入楚

萬葉　古昔有家武人之倭文幡乃帯解替而廬屋立

妻問為家武勝牡鹿乃　云

又庵八繰返せ屋のまれいは或云田ふせあゝもあり賤ゝ家の

ゝゝて地水ゝふせて水ぬくれた去ゝ水ゝんと

箒木　薗原の小清水路の道ゝ見渡せはゝあまる山のうちにゝとふ

言梢水見也其所水入ていい清水の木ゝふ中ゝ去れゝ

ゝゝき木を久ゝもゝゝゝ箒木の名と負ゝ去れて

はあゝゝいは坂地たくはゝ水を源林を背歳水天を刺を半く

或人かくうけるに一とせ受領ふてくく山ふ斧をいるく幸宵しふ
ひとつの巨樹あり谷うの枝大出くとなる石積よこさみ立くまさ
又他木をたちまて椿をたうる樹をたてみあるうる種を焼れ木といへとも我は幸いまさだろうぞ
兼好法師菴 雍系山ふ其遺跡あり とふん 兼好家集云本者の佛坂ふ
住ける猿也 音信通もるる 猿屋敷也 多也
通ドて今又絶てて猿 秀原山うう佛坂ふ
鎌倉街道 今濃合を経く 寛平中国く所の古名乃ち久しく慶
て復通ける中古遠山氏といへ者あり濃州遠山の荘を領ける
時鎌倉将軍の代うれた山道うう鎌倉へ通ける又甲州武田氏乃
を経く河を渡て 長駕馬ふ
波沿ふ稲ふ入る

馬籠（信濃）

妻籠まで二里駅中南北三町

其郷民居山中に散在ける

皂鵰巖 駅の西山上ふあり其名皂鵰の岩ふ集るなり
故ふ名とる 信濃 駅中ふあり小川なり
下阪川 駅中流湯船沢ふ川なり 矣二州堺なり
飯諏訪祠 熊野権現祠に倶ふ駅中
永昌寺 信濃 宗西沢山と号ける
長福寺ふ属を

九山城趾 駅の西ふあり九山也称ける又駅の南ふ岩山とふあり交と
合戦場とふ木曽家傳ふ云 鎌倉ふ三の砦を築く
これそのいちなり
波禰路 馬籠沢より東木曽路し 贄川まで廿一里ヶ間水南へ流ふ
橋川山 千載 等古詠多し
れて落しや木曽はけちの九木橋ふを見る度ふ落ぬ危ける
新勅 木賊ふ枯そのいさ紅ぬ袖ぬきてみうめ嘉も和と鼓危
拾遠 中くふのひもとおきて伝流ふ木曽路の橋はけるやふ花
後撰 まひをふ岩の指紙ふもて水くちぬ花ふ木曽はけうけ
後拾遠 分くふ木曽の橋はえくふ行き忘路ふ岸ふ上くふ雲
新後拾遠 雲もるとトに三ふうけ(ふ)のけるふ行ける木曽の中ふ
新後古今 ふふも狂木曽路の橋はけあふ成ありてや月のもと渡らな
家集 もむ月のうけふとてる山人のいてはるあとは岸のうけふ
本曽川 御岳の左ふ流る大河みて川中の石
夫本 大きくして私うく急ももくふ
見せもやかいう行流の木曽路の君よ思ひの流さワうと

空仁法師
家蓮法師
添頼光
後香殿院宮内卿
後宗教拾遺
添頼実
左大臣
頓阿
後二位行家卿

馬籠
妻籠
馬籠
峠
木曾路
宵
男滝
女滝

淺間開闢偽秦丁力
棧道斜通驛全斉
峯麓蛇龍潛曉霧
樹梢鹿豸泣霜天
蟻附ふ掙ゆ軍夕
驥足欲馳隔澤年
埜老何関尚日事
采薇一曲隔風煙
寂山畑作龍
大湯

信濃 妻籠

三留野まで壱里半駅中南北三町相対して巷坂なり
其余は山間に民居多し木曽路は筑摩郡なり総て信濃
は山国にて階坂多ければいにしへは科野と書り此国東は上野
南は甲斐遠江三河北は越後越中飛騨西は美濃之凡八ヶ国
に隣る国の長さ東は碓氷峠より西は美濃堺占 道程凡四十七里余あり

木曽路山中 谷中せまく人田畑まれにして村里なし茶大豆麦
屋根には石を置て風をふせぐ桝形多く家を板にて葺くゆへに大概此の如し
寒甚しくして人栽培すれども枯るゝ故に信濃には竹を用ゆる事少し他国より取る
用ゆる所は中の楢の櫃にて檜木紙用ふる薬は他国より買来て又蚕の本よりあかり
乳棋全く橋木綿木綿多し山中には桜花多く寒気ふかきなり麦は六月
熟す山中には桃紅梅あり三月末頃皆一時に
に花開く又此国にはぬし松とて冬は葉をことごとく落す夏は本生
松ありこれを落葉松といふ

雌雄瀑布 駅の南路の側にあり雄はたかく雌は右にありて下流蘭川に流る

大妻籠 駅の南路上にあり

牛頭天王 駅中にあり一村生土神なり其外 神明祠 熊野の祠 八王子祠 倶に村民祭る

妻籠古城　駅の東にあり城趾現存天正十年本曾義昌に移を築城て

山村良勝城してこゝに居り同十二年秀吉公本多義昌に命じて
伊奈路を禦ぐ義昌兵城良勝に培して妻籠城に籠る時小伊奈丸
郡主菅沼小大膳諏訪保科等兵を合せ本多を襲んと欲し本蔭の
岩を抜く妻籠城を攻め良勝士卒に命じて鳥銃を放ちこれを防ぐ
伊奈軍登る支を得ず退ひく遠巻にして兵糧城中に欠乏し城陥て抜屋
向茶をそのまゝ馬城洗ふ欲これを見て城中に水沢ありと城陥て抜屋
かゝれとも軍を退けゝく伊奈は小原の良勝伏兵城設けゝることを討ル
士卒死亡せる者多し菅沼大久保敗走に世に良勝の功城賞に

鯉巖　妻籠の小ろ色にあり形鯉に似ろ
烏帽子巖　所の小合渡神社
兜巖　右小藤ふれも
風越山　級田の西にあり妻籠に入る伊奈に通ふ路云
白山権現　禁に白山寺あり

本名三ノ八

千載　風あり城ゆ小こえ入れの附名の御りかた世の庭小明る日来
詞花　風越の峯おろしにてふれの附名の我あり乃まれ
夫木　子向ゆもむもひこゆ子風城の世来世の尾花穂小出小竜
新古　こゝふて世向ゆこえ入こゝちこゝ小雪吹てあり風城のこゝ
文治書　さゝもとゝの禁より吹れて来白小子ゝ風ゝ山峯

清輔
為家
源頼仲
公経

古木曾嶺　級田界ろ
捻樹澤　級田小いてる路倍よあり古樹の大樹あり其死樹幹の
元文三年三月十三日霹靂して焚毀ちこれ小ろ中ゝ古嶺六七箇あり天正十二年村
民これを撤しく村人伊奈軍妻籠城を攻るとき兵糧を運ぶ人足ゝ
其時の射矢の鏃ゝ多く土中に埋れ教に

三留野（信濃）

聖屏中で二里半駅中南北二町程相対して巷城に本名路ゝ
みゝか山中なる名ゝ小源山麓谷小ゝ峡ゝ小ゝ路多ゝ
統中三留聖ゝ聖屏中での間ゝ名ゝ谷ゝ道ゝ小間ゝ数十間
源れ木曾川ゝ路の狭ゝ所ゝ本を伐ゝ道ゝ並べ義ゝ

三富の
のぼり
笠尾まで
かるく嶮
路し
桟道
多し
彩浅拾
雲もかな
下に立る
みちの
はるふ
本谷の
山ふち
源頼具
のとみ

いのまで
本谷路の
秋
長茄子
元全

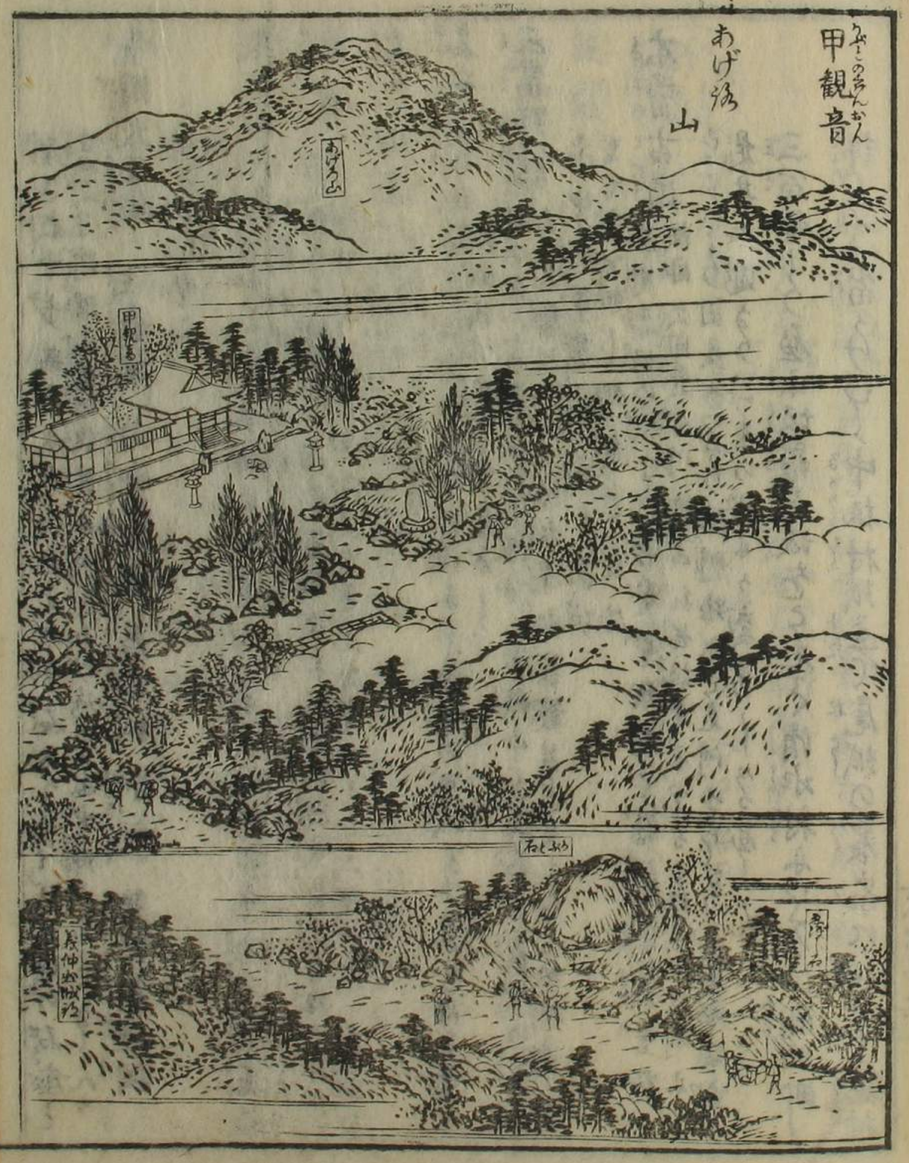
かゝる街道は狭きを補ふ為にとて屏風巡らしてあり
其中に木大巖はだ〳〵出く路を遮ぎふ此るふ橋乃美しいづまも川の上
にけるふ橋あり後道の絶くふ所よりみたる橋ふり他国ふ
ゆくなかるけし神形ふり山の尾濤紙色うく岩にへゝちさ先の山
尾濤紙まふる前ふ前ふ〳〵其岩道ふ撲ふて渓川の流まふ水ふ川ふ落合
前ふ〳〵これふうくふ橋ふれびあふ孔半甚〳〵山間ふ中掘ふ〳〵所有
其向ひ小垣皮ふ〳〵所もふり其ふ〳〵ふ渓川一流ふて曼方の間
に大岩あふ吳ふ吳ふなわ

園原生の碑 神戸の東にあり天明三年ふを建ふ
碑銘逸きふ〳〵それふ〳〵ふ暑れ

牧 牧澤橋 撲川戸橋 羅天橋 いづれも橋橋

伊勢山駅の西ふ河を隔りて里端ふ天正十年

奈岐薙嶽駅の西ふ廟造安の向ふ〳〵山ふ入て本を伐ふ
嶽比岩とふ山峯駒岳を御嶽とお嶽
駅の東にあふ又一名峰本岩中央ふあれを中本岩中央ふださを乱て本ふ
揚篭山 神戸の西ふ〳〵ふ波岩ふ岳し蘭ふ揚篭村あり其上方
山径嶮人登る支まれふり峯の近れ所ふ窟ふり山中



廣さ敷十歩其内方弐三丈の平石あり[illegible]城山焼の石座と云伝へて所々山焼の謡曲ハ声をあげ汐の満ち潮[illegible]

牛頭天王祠　住吉祠　白山権現祠　若宮祠　熊野権現祠

俱ハ三宮聖ハ

あり

等覺寺　三宮聖ハあり曹洞宗日晃山と号し信州松本全久院ハ属し

大雲和尚を開創とし

観音堂　神戸の観音と称し毛馬頭観音城安に村民番火を持ぐむ

本名義冒永楽銭三百貫文を寄附を今ハ證状有て是を義む

岩戸観音　の西岩上の窟中に

千手の像ハ安置し

名産和合酒　本者の若中に酒ハ和合の里人ハ[illegible]を造る

漢水酒味格別愛吉

三富野邸　駅の西ハ一の草山あり信州[illegible]城山ハ本者義仲の孫

年中軍事に[illegible]六世の孫兵庫助家教其子又右衛門家村建武

有て家と[illegible]列侯ハ[illegible]

本曽古道　信州[illegible]坂の駅ハ[illegible]牧聖野上

細田久田見蛭川高山福島坂本ハ信州ハ属

是其古道なりいづれの代ハ変易しるるあらん

三富聖ハ屋ハ坂羅天坂をこえて清水村ハ入る此間世所

許あり皆ハ中栖村城ハて尾城の農家に[illegible]十二栖村

より駒ヶ嶽鮮ハ見西方に時雲城峯に戴きて風色斜あり[illegible]

坂をこえて芝山下左家より聖屍の駅ハ入る

須原まで壱里三十町此駅ハ[illegible]駅中

東西五町俗相対して巷城ハ其縁山間ハ散在に

信濃　野尻

飯盛山　駅の西ハ[illegible]河を隔ル

飯盛を盛るごとし

本者大河　三宮聖の東より城ハ上松ハ入る水流奔

騰して其聲雷霆の如し大雨の時水漲りて畏るべし

牛頭天王　鹿島祠　白山権現祠　住吉祠　諏訪祠　俱ハ小村民

妙覺寺　駅中にあり臨済宗法雲山と号し

須原定勝寺ハ属し

野路里右馬助家益家　享長[illegible]

[illegible]寺光吉本者の縣の令と称ル

貢献の文書[illegible]

本戸彦左衛門致春　慶長年中山村良勝の軍に従ふ[illegible]

[illegible]に其子孫歴代里胥と[illegible]

太刀一柄あり長サ二尺三寸許極色奇怪なり

野路里館駅の南にあり今城山と云ふ城一所を鑿得る者あり古甲曽の朽敗せるおびんを古城の證とす

長野の東山道の中にあり駅次に非ず民居間を隔て山に倚て往居

今井四郎兼平城長野村の南にあり今野と云ふ山頂に城址あり其麓に古関門の址あり里人これを関山と云ふ本名義仲兵を起し北越へ出で合戦勝に乗じて洛に入る其頃この小関を設く矢流を防ぐと見へたり

本曽殿館長野村已後三家の小居に其後こゝに移る義仲に至て滅亡

本居は出雲古墳数基あり里人云本曽殿こゝに居し小基ふ所し也

弦とも其淮といふ夏を志らべば又一岩あり幕岩と云里民云本曽殿

花紙裳ところの地なりと也

弓矢八幡宮弓矢村小あり本曽村こゝに建る

貴船祠俱に祠宮古尾氏こゝに建る

十月廿日石川兵庫光吉神田を寄進し

出雲明神祠村民これを祀る其頃石頃原観音堂を建る

阿弥陀堂出雲祠の傍に安置に本堂殿こゝに弥陀の

天長院長野の小あり陸海宗地久山と号し頃示定勝寺に属し古い

奥言宗中世ゆ禄宗と云ふ什宝に大般若経六百巻有

跋に大應三十三年

永正十八年曽の文字有

雑財天森中にあり

阿満橋橋杭かゝ木西にあり別所

磐出観音伊奈川村の上にあり幸ある馬頭

観音須原定勝寺に属し

扨聖尾の宿城也くこゝに本曽の大河を見くこゝ長野村の天長

院に詣し中途の岩上に本陣ありまた雑天を遥拝しこゝ矢村の古

関門を見て橋をわたれば此間の坂嶮しく平沢もゆ田中も城

絶くこゝ大塚村の今井四郎が城址を見端物村より伊奈川橋を

わたり須原の駅に泊る

信濃 須原

上松まで二里九町東山道駅次なり東西四町斜に対して巷を

なす土産絹紬也諸村蠶糸巻に事多し

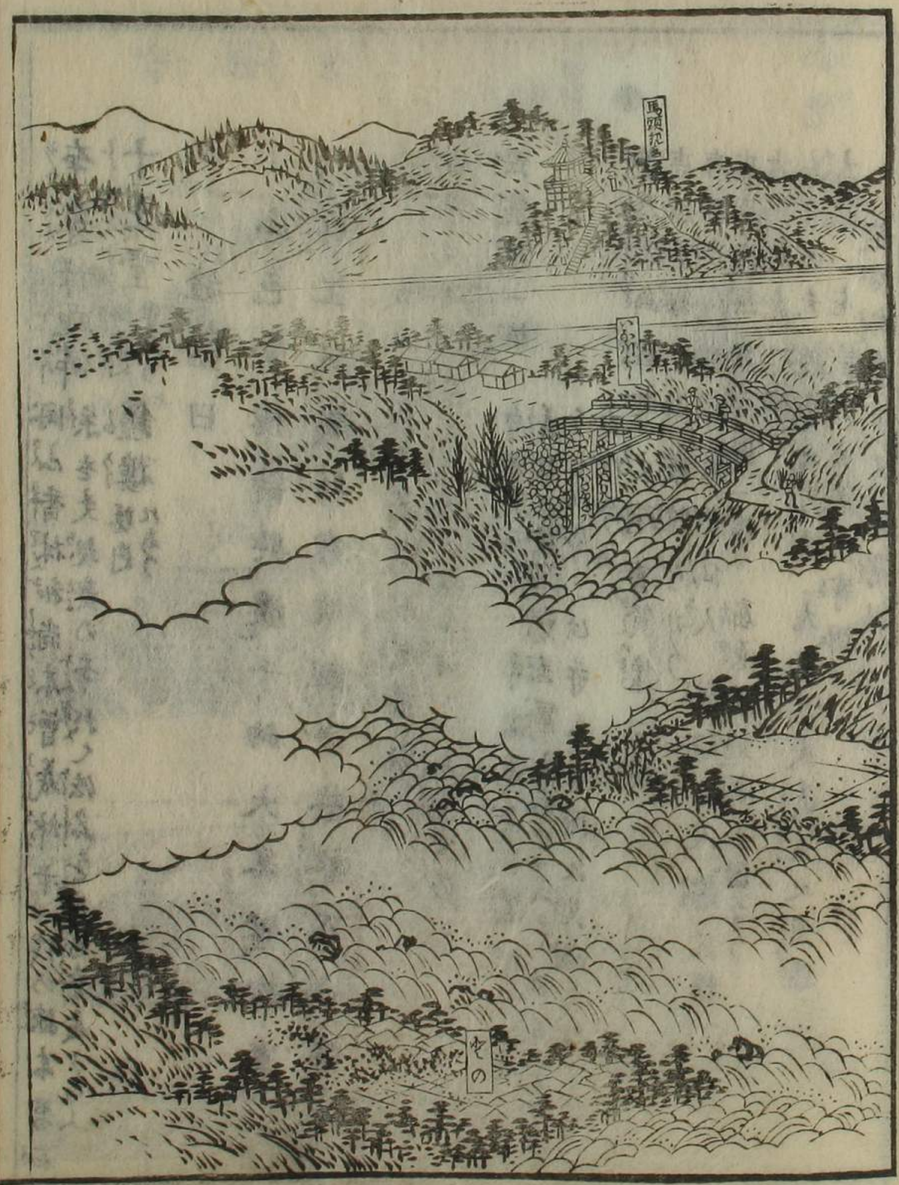
伊奈川橋いにしへは二十七間にして関道なり両岸に大木城夾さ

三重中間大水に流れ

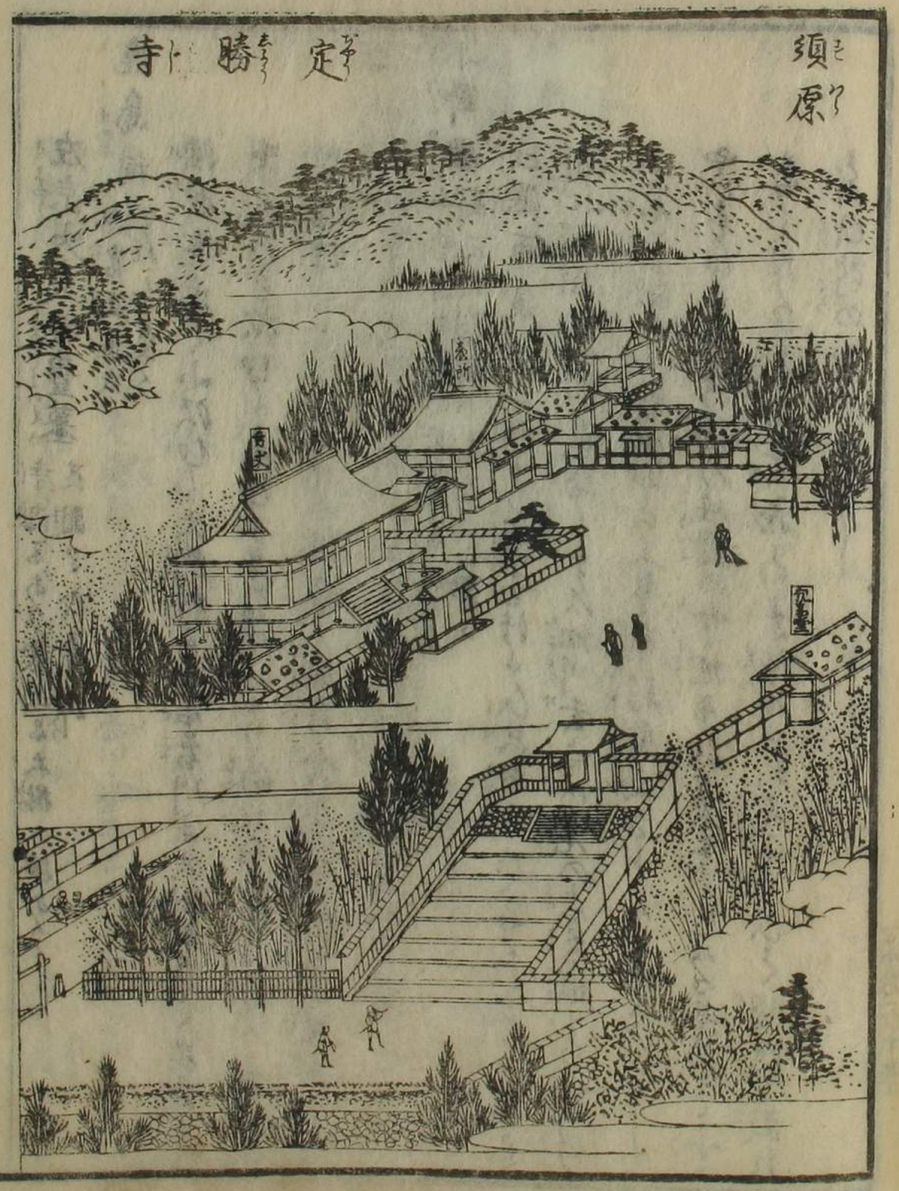
十六間なり

浄戒山定勝禅寺須原の西口少なり陸海宗

寺に属し


馬頭観音
かわ
せの

多賀城
羅城
平城村
蓮華院
弁天



本尊釋迦佛 開山香林和尚 本願義仲十一代の孫 本願右
十王堂 境内 鐘樓 境内
を夫親豊の孫 孫く法名を定勝寺と云
鐘銘曰
山色登樓詩興濃千鉤大器響珍重
群生試聽斜窓曉醒夢聲聲百八鐘
天文十八癸酉王林聖贊誌
迦葉住持慧章其撞の破壊を補く大徒弟誌
涅槃像一幅 什物
寺伝云天正十年本願義昌濃州をうけ
義昌が稚子愛若軍ふ
唐画墨梅一幅 董思恭画釋迦文殊普賢像三幅
唐画出山釋迦懐憧寺
唐画漁樵問答の図一幅 古画龍虎二幅 蝦蟇仙人鍾馗仙人像三幅
古雅
左京太夫親豊之肖像 左京太夫義清寄附
太皷
其他尚多くふ略に
本願之十四

左京大夫親豊墓　寺内にあり墓上に大樹の接あり
其圍弐尺弐寸詳

鹿島神社　神宮玉置氏
これを祭る

須原を出て小沢むら大関村あり本谷川に大関あり其流さ
半ばれど松むら本むら夫渓川ゆ流れあり南むら
番場村これも渓川の橋あり薄蔵倉平立所あり茶店あり
立場なり宮の堂村ゆ谷村を過ぎ萩原にいる

小野瀧　小野村の右の路傍にあり
高三丈許直下に本谷川に落る
此瀑布泉を山間ゆ巖をけづりて只布状にせんがごとく落る
侍小石像の不動尊ゆ細川玄旨の老の本谷越ゆ純粉
小本谷路の小野滝ゆ巻布引其面なども如さくとも
やはらかこれ紅の絹乃此國の奇松あり小ふもしるばやと書
ゆ〜けり真に雪花く素練ゆれ石小噴びく明珠と散れ
ゆ此所の半ばゆ〜

小名川橋　本名川に長十五間南ゆ流れ橋杭なし〜此邑特に急流なり
寝覚山臨川寺　寝覚ふあり孫乗
紀州妙心寺末
本尊釋迦佛　開山法山和尚
辨財天祠　方丈の前にあり尾州牙四代
園覚院殿　殿夜市建立なり

木曽八景　寝覚　夜雨　桟道朝霞　徳音晩鐘
小野瀑布　駒嶽夕照　衡川秋月
御嶽暮雪　風越晴嵐
各詩あり　福島周甲山氏良由作
尾州の家臣

寝覚林　孫廣あり
より直下に見おろし其間ゆ隙ゆ寺にいる其方丈の庭中
寝覚の床を隙川寺の裏栽のうゆ岩間を伝ひてゆ
みちのう其道をれいぐけ〜祝さ絶の床ゆ本谷川の汀ゆ
あり大岩ゆ〜横ゆ十間長四十間ゆ有こい本谷川ゆ
いと狭き所なれど滝形ゆてふぶ所水のさゆ間ゆ
地を深さゆけりぐ〜そ其祝さゆ床ゆいとく大なる

家集
山ちかく
突初し
ゆき
久かたの
雲井ふ
るゆる
滝水
たゝ糸
中務親王

とゝの野の滝

巖あて河ふ隔めり亭記とこゝあはいけやうゑ岱祠拙ゆ〜まん
雑天を早き平なる所成りたく家とゝ其岩周のめくあるこれ
幾許岩ゆゝを走ゝ其こゝ和平なり又亀ゞれこゝ河ゑのゆう
あて大石あり水ゆゝ西ゑ本名川流る渡瀬の家ゑ大巖ゆゑの
方本名川よのぞんこを石岸屏風を立てこれゞおとゝゆひも
大巖あり西岸の間あれもぐひゝ二間あるひゑを三間瀬ありく
山賊ゑ綱をゆゝて此河成通ふと能ゑ岩の前下の所長ゑ十間
許あり上の水ゑ巖口の岩を上鶴岩やゝふ河中に板石として一つの
石有川むゝひの大岩のこゝよ三ツ九穴あり一のゑある成大釜とゝふ二の
ふきを小釜とゝふむゝひふ屏風岩とゝく屏風を立てるおゝくある
其下ゑたゝみ岩として要ゆゝく名岩あり又名ゞ岩として烏帽
子ゑ仏ゝる岩あり其名ゑ河のこゝ形ゑ平岩ゑ其こゝ水龍岩有平岩
のこゝふ黒岩有其黒岩成象岩とゝふ又川むゝひの岩ゑ水槽柩梅松

などゑげゝくゝう敷ゝ九此地ゑ他所の勝まゝる風景にもこえく
奇妙の風色なりいけしゝ云繁ゑも述げし
こゝふ奮浦為が釣成ゝれ〜本とゝふ俗説あり浦為が車ハ日本紀
雄畧帝の條又ゑ扶桑畧記ゑ見へゝれども此地ゑ至り〜変ハ見へず
されバこゝは本名為道中の名所ゑ〜て此街道成ゝふこゝまゞこゝふ
立寄ゞ所ゑ〜飛雲とゝふ謡曲ゑ本名れ山中ゑく三熊野ゑん
山伏あゆ九ゑのふ逢ひゝる事成作ゑ嶽ゑる書ゑ見へゞ秘伝ゞ
ゞ〜こゝいひふゞゝ先ゑ一奇勝ゑゞ

近衛稙家
宗熙公

なふ河のゑ高ゑ義ゑ孫ゑ成度光の家と雅名ゑ〜ん　幽斎
山里ゑ孫ゑ光の家乃さひ〜ゝふゑ成ゑ〜ふ歌ゑ〜ゞ　鶴山
岩の松印九ゑ波ゑたゝゝわ旅の孫ゑあれ家ゑ〜ひ〜ゝ
是ゝ成ゑ是ゝ庶せゝゝの家衣ゆ〜　ゑ世成
寝覺仙林巖経間碧滝鳴玉白雲閑　吉田
躊躇欲問當時跡頼遇邨翁採藥還　植田義方

岩
巻き
あも
祝さめ
て
月
あつ
蘭斎

臨川寺
寝
覺
林
本堂三十八

獸類皮店 本谷の山中に産ず 東子 多し

はべり 彩端城見る小熊の皮 熊の革 猫皮 貂 鼠の皮 ひとひ 熊の
爪百 鹿 狐 狐 牙など多く出す 店所くあり 此産

猟師 切山々 山 狩獲 くこれを製 ふ出るゆさふ人
これ城求 本谷の名産 熊 六雄将軍の端も 多くの革店 にけるも又 ふ

観音堂 駅中にあり 天正年中 土民田城耕して 鋼 城 一巻を
建 今 火
阿弥陀堂 荻原の支村 吉野 ふ あり 阿弥陀 仏の画像を安置 信
親鸞聖人 第二世如 上人の画 所
氣比祠 鹿島祠 神明祠 倶 上松乃祠宮 德 武 熊

三級廻翁 閑居 二級村 此人中むし 弘治年中 此人 世業と厭ひ
此本谷の山中に居 く不老の薬 城人 ふ 其頃の名 鬱なり
あるとき山中奥深く入く 茶を植 これを製 く 薬味を調ふ
世 三帰 ふ 謡曲 此人を出せり 良方の名 愛 茶

○和極集上下 ○新撰之方 ○小兒諸門
○當流大成捷徑度印可集
○啓迪菴日用灸法 ○治肺氣通藥之部
○諸藥勢揃藥組之方并諸療
○當流依門下學主懇求 ○辨證配劑

合九巻

弘治第二丙辰十月十九日夜組之

上信濃松

福島まで二里半 駅中南小五所 相茶 して巷城あり 其隙
間小数 左して 住居 此駅都會の地 ふ く商人多し 繁昌
地 駅の小 彩茶屋 ふ 繁 武三家 り 蕨餅を鬻 て
名物 ふ

本曾桟 蕎麦 駅路の中にあり 慶安元年 尾州敬君 ふ 有司 命じて 桟道 城
茶 長五十六間 横幅三間 尺 又寛保年中 月 邦君 ふ
有司 食 て 左右 石垣を 数十丈 築 上 桟 を 隔 城

上松より
福島の間ハ
桟乃の旧址
あり
ハ上の
山ゑ御道
なりて
桟道ハ須〻く
はあれつゝせ〻
後世今のゆく石を積て
橋も短く險さとか〻
ひけく〻や
金とゝむ
蔦かつら
芭蕉

今往来安穩なり支ふ〳〵橋下の石ハ落あり

此石垣慶安元戊子年六月良辰

成就焉畢

又寛保元年辛酉十月吉辰

御嶽川

御ぶけい本谷の御嶽より其谷の奥ハ良材夥し猶後より其渓の川上ハ十里許あり此河の流ハ材木多く出ル此河上の方ハ本谷より御ぶけ〳〵く駒が嶽より大ゆ〳〵く高き山より西北ハあくれり

はるゝ雲多き山より予さ月の末に通ずるゆゑ雲多し富士

渕間ハ多く紙有る河の辺ゆ〳〵道の右ハ御岳の名所あり本渓川

を御ぶけ川ゆ合流れを合渡と名ゆく此所より御嶽見ゆ

山中に材木多き半ばよりハ檜椹松模槻多し杉多し

櫟多くして多ハ深ゆ〳〵放ハ川下へ流れ半ばゆ〳〵御ぶけハ

本谷ニ出ル

真木特ハ多し又山中ハも道の側ハ樵の本多し大樹あり桑も朴

の木に似たり枝多くして秋ハ〳〵偏して紅ハ実あり〳〵株ハ〳〵土民

これを採りて粉ハ〳〵偏して飯ハ窪く食用ハ〳〵也紙譜ハ〳〵

其本より模文あり器物ハ可なり〳〵も尾州君より代ハ半を禁

制ハて〳〵独り人〳〵宇紙民の食物ハ多ゆ〳〵なる材木を伐ハ

松人を尾州君より和泉紙使迫江の人を備く遣さる毎年春夏雪

消二三月ハ山に入る十月ハ出ル元禄千百人より半紙を〳〵表〳〵ハ

入ハ松人まさりなど持く毎日引もこ〳〵上方より本谷へ下ハ松

人〳〵も山中ハ家有て居住を本ハ樵材木に制ゆあるひ多樽ハ〳〵

長ハ尺許多ゆ小尺本ハ河へ流せ尺いゆ〳〵も多く多ハ随ひく流下ハ

河中の石ハ〳〵〳〵そ〳〵ハ〳〵ハ紙ハ奉〳〵るゆの来りて落もし

私ハ〳〵〳〵水ハ多く石高〳〵れを通〳〵ハ流〳〵本ハ本谷と色て

英法の門右団の江里川上ハ織と所よりて〳〵ハ石常ハ大絹と張て

一本も下へ流さんせんぢむ〻〻〻

山村中元

高橋

義康古城駿の西にあり敵に三峯双び聳ゆ

本曾肥前守義康家譜 左系大夫義生の子なり源家の嫡孫の國司及び甲州武田信玄尾州織田信長と年齢二十餘年ほゞ及べども若く敗走せしかば義康を憎むもんぐ和を講じ

織田信長と年齢二十餘年ほゞ及べども若く敗走せしかば義康を憎むもんぐ和を講じ

の威勢此時盛なり

永禄八年義康没し

年又十二歳

本曾左馬頭義昌家譜 義康の長子なり後伊織と号し嘗て武田信玄女を娶りて嘗て和睦を勝頼これを没後其子勝頼と隙あり織田信長と和睦を勝頼これを

国に大小怒り天正十年典厩信豊を攻め将士しこれを撃ち先鋒

織田信長父子大軍を発し甲州に入る逆徒諸将至る義昌大ふられを級ぶふ

織田信長父子大軍を発し甲州に入る逆徒諸将至る義昌大ふられを級ぶふ

軍を減し三月十九日信長上諏訪に至る逆徒諸将

く武田を滅し兵十万騎義昌に対し面謁を信長其功を

寺に陣し賞し天正十八年豊臣秀吉北条氏討平もるに義昌を世く本領を

右公北条氏を滅ぼし頃これを忘れ徳田へ左遷し以国の芦戸に

て後一万石を賜ふ

名産 駒本曾の流村馬を牧養し所の駒毎に二歳に

至れば福島に方に

つゝ其後四方

に鬻ぐ

赤魚 本曾の大河及び諸渓川に多し形狭長くして四五寸許黒斑あり味美

河鹿魚 大河の岩間に多し長三寸許土人云よく鳴く其夢

岩宗魚 流間中に多し長七八寸極大なるもの鰐のごとし

名製 乳蓄 諸村みな乳を製造し効論福島に多くこれを鬻く其

凍豆腐 凍蒟蒻 諸村山中極寒の地これを製し福島に

凍糕 山村氏則小倉例年関東へ献ぜしは地の名物

諸薬種 本曾山中に多く採る所数十種多く

諸器物 梅を以て諸品あり

駒嶽 本曾東嶽に其高数千仞数峯連綴して其一峯の頂に

石あり形ち馬のごとし

或記に云ふ山に神馬あり三季物語に天一の頃織田右丞相甲州

を征伐して軍功めざましく諸将に白馬を賜ふ

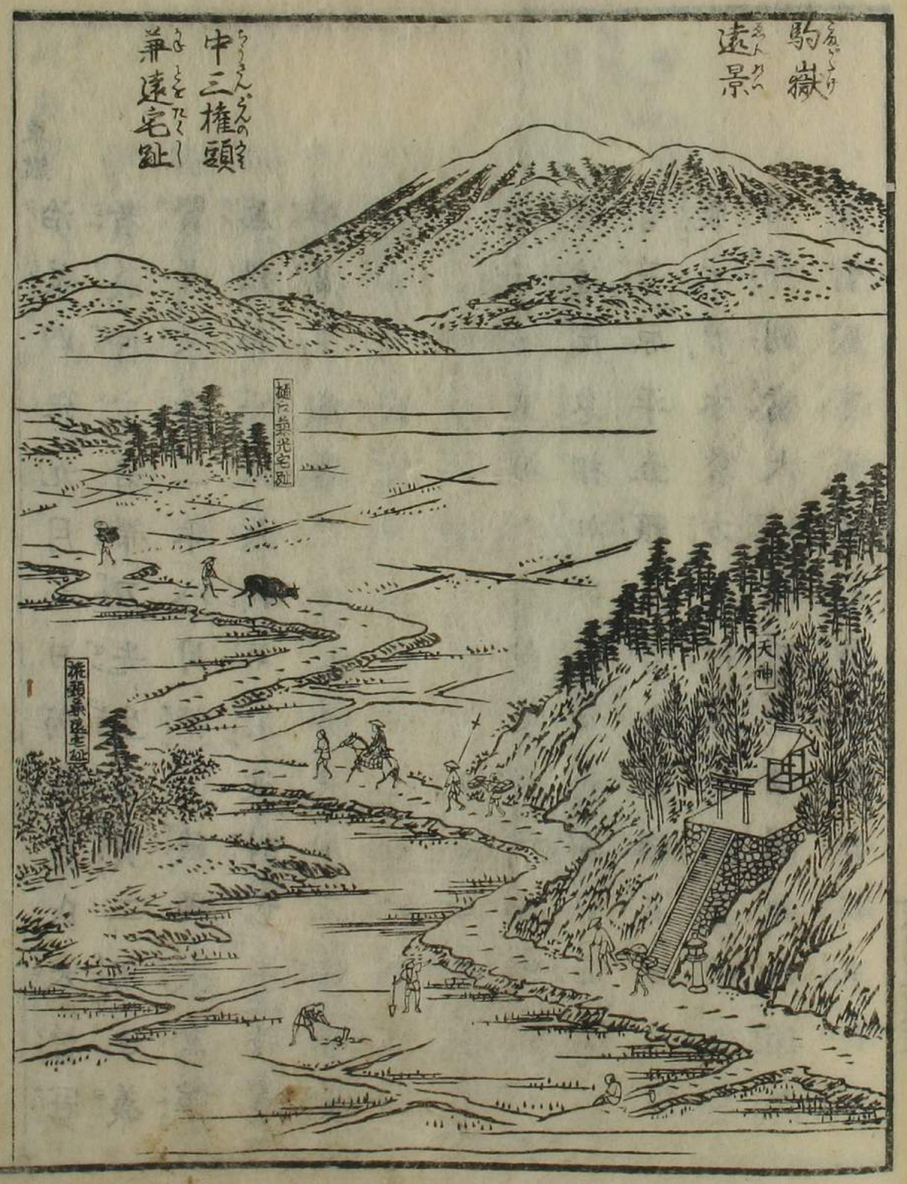
此馬神馬なり

續日本紀云

天平十年八月信濃國献神馬黒身白

髪ノ尾云云

斯のごとく旧記あるをば昭年諸州の軍卒狩集て駒嶽と囲んでこれを狩る
んや思ふべし此大将の富士の牧狩ふ倣ふべしや詠花文度ふ
所其年の六月明智光秀が為ふ滅亡て其事聞て武山ふ三峯あり
三ツの内第一ふ高れを大嶽とふ極く大山なり故ふ遠方より鮮ふ見ち
本曽山の中なり山上の雪六月土用の名に消く八月ふ又積る駒ヶ山嶽の
麓を大原とふ其所ふ川筋あり駒ヶ嶽より流て水なわ駒ヶ嶽れ
山脇上洛京宮處ふいる武奥ふ今村とふあり て龍剣山るどいふ寺あり
寛永の頃飯田城主脇坂侯其勝の陣屋ふ止宿あり て殿邑の八幡社森へ
狩ふ出れ駒ヶ嶽と隠れ名く詠ん
尾も志為て頭も名て駒ヶ嶽かんのぼるとて雲のくやさよ
中三権宇兼遠家駅路上田村の西ふあり今田圃とある其林中に
服松や今松一本ありこれを ほんぐ本名義仲の社
植て兼光宅趾



治承四年九月七日丙辰源氏木曾冠者義仲主者帯刀先生義賢二男也義賢者久壽二年八月於武藏國大倉館為鎌倉惡源太義平主被討亡于時義仲為三歳嬰兒也乳母夫中三権守兼遠懐之遁于信濃國令養育之成人之今武略稟性征平氏可興家之由有存念而前武衛於石橋已被始合戦之由達遠聞忽相加欲顯素意爰平氏方人有笠原平五頼直者今日相具軍士擬襲木曽木曽方人村山七郎義直并栗田寺別當大法師範覺等聞此事相逢于當國市原決勝負兩方合戦半日已暮然義直箭窮頗雌伏遣飛脚於木曽之陣告事由仍木曽率大軍競到之處頼直怖其威勢逃亡為城四郎長茂赴越後國云々

兼遠は信州木曽の人なり姓は中原故小木曽中三とよばれしなり向小常刀先生源義賢其兄左馬頭義朝と不和なり武蔵大義若丸を捨て悪源太義平を殺を義賢幼児あり駒王とよぶ義朝別当宴盛抱き負て信濃に下る兼遠小托に兼遠潛に養育して元服をさせ二郎義仲とよぶ治承中平家上皇法皇羽の騒動に押籠高倉王義兵を起しぬ附義仲王の令育成更て義兵を挙げ兼遠これを輔佐を兼遠に三子あり別当樋口二郎兼光今井四郎兼平落合五郎兼行みな木曽殿に随従して武名あり又一女あり巴とよぶ頗勇力なり

峠殿 上田村の民なり孫左衛門と称して峠殿と称せり其宅あり今に残る酒を造りて酒祝を呑せざるとなり

殃あり村民大小これ怪異多し羽日将軍源義仲こゝに潛居しゆゑ
ゆゑ土人其德を慕ひ敬崇し祭に
水精山　駿ヶ岳峯　なり其地むかしより水精出る又金濵を掘穴
あり今に亦多く金濵なる物あり
烽火嶺　本谷川の西岸上にあり福壽の城山と相對を侍云本谷殿
の羅城なり其時作候をは峯に烽火を挙て急を告る故小名く
野婦池　駒ヶ岳の西小の禁にあり池三町許其水側ふべくしあの
紙漉　百姓の婦に教て作しむ云大原村の農民の女なり系譜れ
よりこれを觀ひ見まゝ髮逆ふ立く額の肉角を
生じ其丈大よ四尺ばかり宿して侍の柳を截く杖とし往来に殺る里人
逐出を意ふ平原に暫の側の立く身を投て死を其霊鬼となる里人
蕩にあり時杖を池の水面の機を識す池
砧大谷　小谷の西の山下にあり神よ祀て畢の時雨を祈ふ小谷に験あり
麻大年ふく小石壁の下に埋む犬悲しく家下に猫鼠沙
見る小悲びを力を抱く殺に今の至く其名猶く大の悲声なり
里人時くこゝを怪異者
斬蛇潭　本谷川西岸より相傳ふむ一農夫あり此小州を刈く
困しこゝ倦んこゝに睡未くこゝを聞さ呑んこゝに時の孫を探さく
怒さ起く怪斬ふ大蛇水よ深んで展物して畢の死をこゝ
其地を斬蛇の淵と以て其農夫孫と荒めくる孫に伴ふ孫を病む
このこれ怪見まゝ忽ち金ふ鎧ふ頭法立
明星巖　本谷川の西岸上よりなるふ輝なり
して救丈遠近ふ

信濃
宮腰
藪原より二里又宮越こゝ書に駅中東西に町半相對
して巷を形と其保山間の敷在に
正八幡宮　里人云本谷義仲此神祈願して え服をとゝ
まこと一説ふ義仲の靈を祭る所なりこゝ
南宮祠　此一村生古神
德音寺　陳海宗日照山寺小屬に開山祥に
本谷義仲の牌を藏む開基朝日將軍本谷義仲宣
公大居士と書に
什物
本谷義仲及び樋口兼光今井兼平画像三幅あり
境内ふ茅作堂十王堂なり里人其地と
本曾義仲城　駅の東にあり宮原と云
家系ふ清和天皇七代の孫六條判官為義三男帯刀先生義賢武
義國大蔵谷の館ふあり久寿二年八月其兄義朝と不和なり其ふ
惡源太義平こして討平ぐむ義賢ふ二ふあり其姉ふ伊仲家と
以て源二位頼政妻とくふ其次を義仲とゝ稚名を駒王と名
ぐ父義賢害せゝ内二崇齊藤別當実盛こ扶伝匿こて伝列

に來て中二兼遠を養育し鈷を柏原村に築
てこれに居しむ仁安元年柏原八幡宮に於て元服し今の文の試
八幡宮是より名称本多二郎義仲と名乗る治承四年平家上皇と
鳥羽の離宮に幽閉奉りし時に源三位頼政が勸によりて高倉
宮義兵を起し令旨を諸國の源氏に賜ふ義仲令を奉じ兵を
挙げて寿永元年九月九日越後守長茂を横田川原に合戦して
大に敗る長茂逃走る武威益振へり今井兼平樋口兼光猶親
忠根井行親耳目股肱の臣として程なく四天王と称す日二年五月平
軍十萬越中礪波山に陣る義仲逆に撃て大に之を敗る平軍死る
者の七万人殘兵京師に逃帰る義仲北に退て倶利伽羅山に登る七月
廿四日上皇叡山に潛幸し義仲供奉し洛に入る之れ其軍兵凡五萬
平賊帝を奉じて西海に出奔し義仲父祖の恥を雪む事に不世の
功あり八月十六日伊豫國住人河野四郎通信が馬頭征夷大將軍に任じ上皇又命て

朝日將軍と号し頃朝寵を奪はれこれより先高倉宮害に遭ふ其
王子僧となる小國に流落を義仲これを拒奉りて洛に入即位あらん
事を乞ふ上皇聽容なりし安德帝の尊君を奪ふて天子に立んと欲を
辛くも聽し大に憤怒を含む人あり義仲に讒して上皇兵を起し
義仲を討んと欲し義仲大に怒り十一月十九日軍を發し法住寺殿
を攻る官軍大に敗られ公卿金枝に暴虐を基し源頼朝大に
驚き範頼義経の二將を使して義仲を征伐を元暦元年正月廿一日東
軍洛に入る義仲粟津原に敗走し流矢に中て首を授く義仲の人
となり勇猛なりて兵を用ふ辛寡なりき衆に勝ち必勝を
辛ふして大功を立一世の雄せり惜しい哉惜む可し
ふ誤て大逆に陥ひる事惜む可し
樋口次郎兼光館駅の南に大樹多し
中二權守兼遠の長子なり本名成に従ふ屢戰功あり所謂樋口

義仲旗揚
義仲寺法竹
南宮社
巴山

木曾義仲の古城
徳音寺
八幡
巴山
徳音寺村

天王の其一なり元暦元年の春義仲の命に依て兵を率ひ河内に
赴き十郎藏人を撃て正月廿三日東軍洛に入る義仲戰さる兼光帰る
洛に入るゝ二月廿日東軍に降る向に法住
寺殿に攻て官人を殺し其罪殺を免るゝとて六条河原
において斬罪せらる

今井四郎兼平鈴駅の東にあり
本名敦の隣地
兼遠の次男なり兄兼光と同じく義仲に仕へ屢戰功あり四天
王の一人なり元暦の春正月廿日東軍洛に入る附兼平兵を率て
勢を拒ぎ軍に敗る義仲也東に赴き粟津原にて奮
戰し主君の戰死を聞く忽ち歎軍に多く敗を馬上にて自害に
後世其忠を賞に

巴御前 名は巴女張なる所の郡に涼藻に隠む
駅の北に大石多し巴が礫と投げ所なりと
中二兼遠が女なり義仲妾となり甚勇力あり善戰に事永中

本なる三ノ三十

小陸の戰に兵を率て時なる元暦元年正月廿日東軍洛に入
義仲の軍敗北して勢国に赴き士卒散ぜるを聞て残兵僅七騎巴女
其中にあり義仲巴に向て曰我運命今日に尽る死に臨む女子
戰場なる事恐らくは後嘲なり速に疾去るべし巴女止む事能
得ざる別に又歌の中へ入て小内四三郎家吉と云者大力の士なり
巴女を捕んとて馬を並べ巴が髪を持佩刀を抜て戰はんとす巴女
拳を挙て其肘を打前に倒れ馬を馳て山路を絶本名に向て其後
右大将頼朝巴女を召て和田義盛に取て見たる力の男子を生し
度しと宣に義盛辞て終に納て後朝比奈三郎泰秀を産に頗る
勇力を以て世に聞る

山吹山 駅の北にあり土人云山吹所
山吹女の墓なる所

平家物語云義仲に二妾あり一に巴一に山吹元暦の合戰に山吹疾
あり系作に止る又源平盛衰記に義仲に二妾あり一に葵一に巴何も

も善鄙の藝低浪山ハ戦死二説同じかゝ武云山吹ハ奇藻別嶋竜
盛ゞ女ゆゑ句ご其是句を支を志ゝ
萩曽川 萩多の山中ゝ出ル
往還橋 駅路の中にあり長サ十二間
木を架して橋とす
徳音寺橋 徳音寺門おゝあり 長サ十八間
義仲手洗水 腰の東道の傍ゝあり
石碑云 往ー古 木ー曽 義ー仲 公 鎮ー守 南ー宮 神ー社 水
御ー手ー洗 也 唱ー来 廢ー年ー歴 久 矣 歎ー之 今
新造 立ー石ー船ー者 也

信濃 藪原

京良井まで一里半 駅中南ハ五町許相對ス
巷城ゝ其外山間ハ散在ス
熊野権現祠 藪原の一村生土神ゝ祠官奥田氏
別当六月十五日
極楽寺 隆源宗法城山と号ス 系作妙心寺ハ属ス
開山 茂林和尚 古昌十右衛つこま弐建る

藪原宅 古昌十右衛つ上邸中邸下邸等の址今みか田圃ゝ
ケ人ゝ木曽義昌の家人ゝ此邑ハ居住ス 藪原氏
孫今
駅亭の長ス
五反田橋 藪原ゝ萩多ハ往還の橋ス
長サ十一間木を架して梁とス
巣鷹官舎 駅の北にあり毎年本多諸侯ハ鷹の雛を生ずるゝ
府下の鷹匠本ゝこれ沙汰ス
土産 駒 駅ゝ葡萄 本多の諸侯ハ上供を
名造お六櫛 ケ所多シ 腰藪原京良井
抑ハお六櫛ハ本多九ハ中の名造ゝて山間ハ田圃少ク
多く諸品を製造これを貨ク業ゝ特ハ近年お六櫛也
名ゝて諸州ハ高ハ本ゝ棟梁ゝハを製ス櫛のゝ高ゝ
伊奘諾尊にして沛子素盞烏尊殿の川上ハ奇稲田姫ゝ湯
津の爪櫛を沛髻ハ挿ハ 起ゝ其後欽明天皇祀あ
八品大明神と崇発椹匠の家々こゝ拙を弄ふ
爪櫛 排櫛 扉櫛 小櫛ハの諸品く 京作 綾小路大原祠ゝ伊弉諾尊弐祭て八品
品ゝ水櫛 解櫛 真櫛 透櫛

明神と氏子相図ふ氏神を祭ふく其恩恵弘報をへ〳〵
鳥居嶺駅路坂嶮〳〵馬も牽がたき所たり〳〵本谷を
御嶽の名居〳〵ふあり〳〵名くん今いか〳〵
信玄史本谷義康とこゝに合戦あり其没天正十年武田勝頼
こゝ今福飯景吉弘大将として人数八千騎ゆ所へ洗ゝ本谷た
馬頭義昌信長公の御方として七ゆ騎人ゆく名居嶺へ馳向ひ
戦ひるゝ本谷勝利を得く甲州勢と考く討とる夏誌書ふ〳〵こゝ
信長記武田氏御私欲月くふ亦を牽くふ横〳〵ゆ本谷義昌其外数拳
謀反と企るゝ中暑月十二日信忠卿波年こゝ御出陣あり〳〵その
夜ゆ土田ふ御宿あゝ十三日高遠十四日岩村ふ御着ある跡の方迫
将監毛利河内ゆ水野監物同宗義勇尉ゆ十二日の未明ゆ岩村ゆ
信列伊奈口へ歩越ゆ月十四日ふ信州松尾の城主小笠原掃部助味方
ふ参ゆ忠節を致ゆさとゆ城ゆ付く團平八森勝蔵若き者ゆ所
早手合ゆて小笠原掃部助を攻く烟を揚ゆるゆ伊田城ゆ

楯籠る伴西星名ゆゑも方々逆心の體を見改め抱つゞくやうにて
其後則同じく虜小森勝義四五里隔陣取くなつゝ山由城国と
和〻〻一騎駈ゆけ付退後をくる者ども討捕頸三百餘信忠は
へ進上ゝ扨勝頼も本曾表を遣やして今福筑前守ふゝ子の馬廻
ばかり差加へ初合其勢八千餘騎を居作表へ差向ける二月初旬の頃
彼表へ蹟雪深く谷も峯も平等に成て一向叶ひがたく折ふしなれど
今福筑前守武者大将にして本曾口へ出働きける義昌が先勢も島居
作氏表へ出て嶮岨の要害を搆へ居くるゆゑ今福が手遣と雪
の早く去て其者共迫進してなれも義昌も安うゝ更ゆとして苗木
久兵衛尉と合せ出張を初合其勢七千餘騎奈良井坂と奥を叫んぐらけ
者居作丹て今福と渡を合ひ既に合戦ふゆゑ雪谷峯に満く戦場中
さるびやうふれをおのぼる割腹もいち志る紀公地して進ふをくんぐる勇士
互ふ者とゆゑ辰刻より未申で志のゞを以て矯をわり切り捨を川

南風小風ゝを先途中攻戰ようゝふあよ久虜尉父子右手れ心の迫とつゝ
押廻ゝ横地小実ゝ雖ゝ逆ゝ岩ゝ崩ゝる今福横強ゆ愛く突ゝ立ゝを
敗亡ゝ名れゞ三里ゞ間追討ゆゝ飛ゝ捕頸の注文宗法の者ゆ跡始
治部ゞ輔育賀備後ゝ笠井笠原ゞ山田右衛門進其外究竟の兵ゝも五百
七十餘人ゝ其頸共中将信忠ゝへ本多義昌ゝ指申ゝ扨ゝ信感斜
ゝ使者ゞ黄金百両小袖三重下ゝ給ゝ義昌へ之ゝ類ゝ
働の有御感の手柄を誉られる尚要ゝ之を信長記ゞ有ゝ様ゝ見ゝ
義仲覩水 ゝ居作ゞ有ゝ様の高ゝ山へ飛ゝ入ゝ
東の方に雖強の高ゝ山へ飛ゝ入ゝ
ゝ支ゝ出ゝ乃ゝ出ゝ馬ゝ十九里ゝ飛ゝ入ゝ
白狸 雲雀ゝ入ゝ

信濃 奈良井

塾川まで一里半又猶井ゝも書ゝ駅中東西七所餘ゝ有ゝ対て
巷をなん其餘民家散在ゝ山宿繁昌の地ゝ本多
駅中の甲ゝ

奈良井 鎮神社

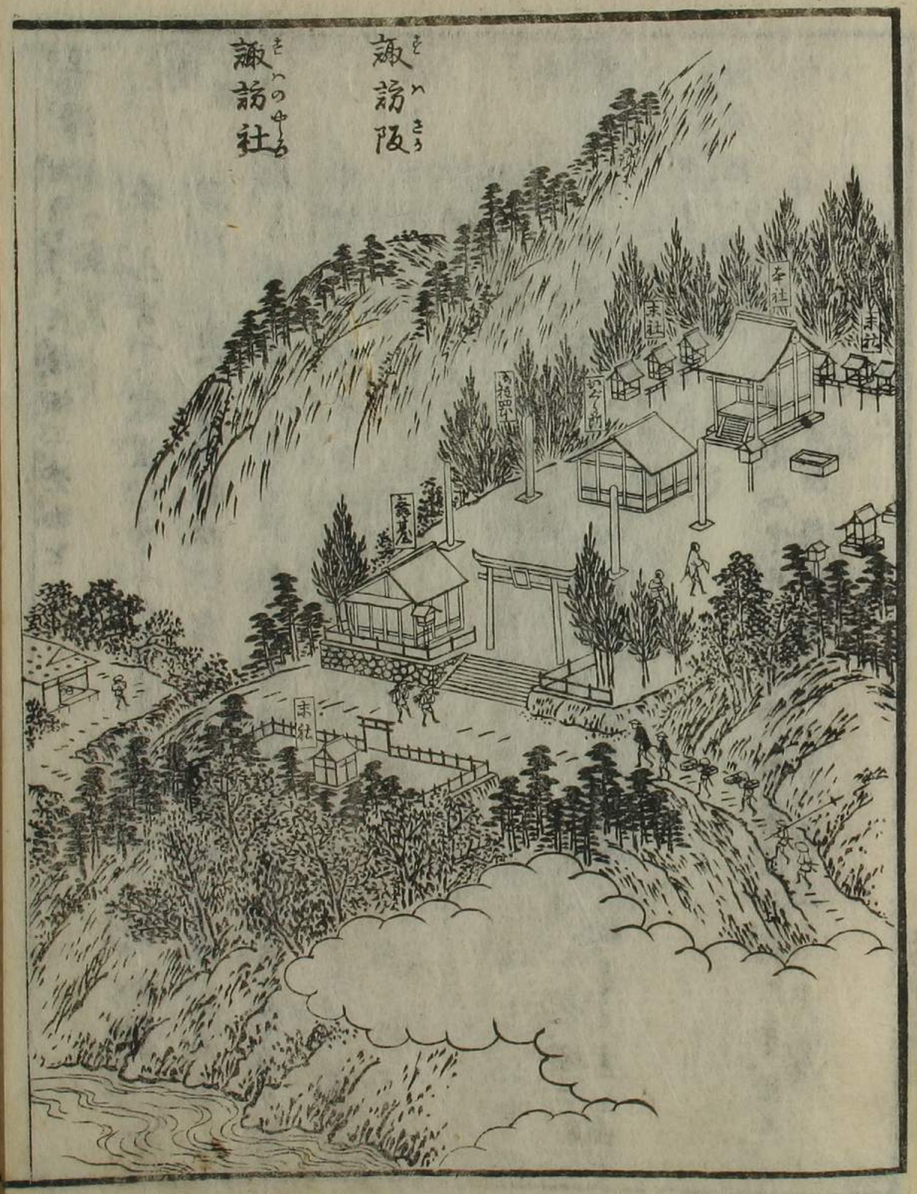
鎮大明神祠 奈良井の西口にあり里老傳に云元和年中癸
經津主命を祭る時疫行て困しむ村民杏田家に請て祠を建く
例祭六月二十三日

鍋懸嶺 伊奈郡の東にあり絶頂より東の方を臨めは天
伊奈郡の諏訪村歴々として見へまた高遠の城及び
竜川又眼下にあり壮観の地也伊奈諸木のまれ此路を
馬のかよひもなく甚嶮難なり最要害の所也といふべし

奈良井橋 駅路にあり長十間余とすへし
梁とし枉し

大寶寺 臨済宗慶傳山と号す治部の奈良井郷妙心寺に属す傳云
天正年中奈良井治部少輔義高の創建なり
安和尚開基とす義高天正十八年卒す法名を
慶傳寺殿開山と号す此地に斎き
高の城址なり今に残る山城上城下城と字す
寺の庭に小川竜樹あり長サ五丈許義高の菜園の址
なり境内に十王堂

長泉寺 曹洞宗玉龍山と号す駿州真珠院に属す傳に云貞
義高の墓あり
治元安和尚開基中世廃絶し文禄元年開山應和
尚中興を藤田能登守信吉是を帰依し其法名を直
指院殿一庵源山居士として其牌寺にあり信吉ハ上杉
景勝の部将にして武名あり中頃故ありて仕を辞し
去て京師に住居し後に信州に帰て卒す嗣子無きに
よりて其家断絶す境内に
白山権現祠観音堂あり



京良井治部少輔義高館

宅址今詳ならざれども本邑廢流伊豆守家

千村治部少輔重照宅

今民居となる重照自栽ふ林檎栗の樹信の後之天正十八年卒に傳記詳ならず

千村治部少輔重照は豊臣秀吉の舍弟八郎右衛門重政の子なり父ふ

本邑義康乃び義昌ふ仕へて武功あり重照領地八千石

其後義昌下総国芦戸に遷ふ爰なりしが義昌卒に

その子紙三郎幸若敬縁なり家臣持ましも破れ浪

道に従して去ふ其ふ孫

今ふ西川く尾州ふ奉仕

土産

稗　粟　蕎麦

山村水田ふ作る稗粟

鮭　海より流ふ河ふ産ふ鱒も海より流ふ

なるゆへ貢より上ぶ

尺詳　年毎こまと産業と四方

上供　ここの名産と

名産

諸器

民居ふ田圃ふ諸器を製造して産業と四方

ふ響くこれを白本細工と

諏訪明神祠

平沢ふ里老傳ふ云武王の時ふ大宝

二年に創建ある天正十年本邑

義昌武田勝頼ふ攻ふ為居城の合戦不和ふして典厩信豊ふ命じ本邑を

焼ふ大を放ち祠を焚く書記ふ亡

失して年寅傳らざる例ふ六月廿二日此所の生ける神

本社のに方より傳ふ七月年因毎ふ月甲寅の日

建設ふ神殿に舞楽

其外末社多し

本邑三百五

平澤村の名ゝ檜細工塗物と
商ひ家多し
幸山あて武置いあり〳〵ふ温泉あり坂ふ勢川也
名ぢく東山道駅次此所より東江松本領ゝ西ゝ
信濃 勢川
本谷台の間みふ尾州侯の帝領なり当駅中東西に町
俗相對して巷江ゝ最殷阜なり其餘の民居散在
桜澤橋 駅のひがしにあり是ハ本谷伊奈の界なり長サ十弐間
西江方六間尾州侯より被造ゝ東六間松本侯より被造ゝ
番所あり
勢川 駅ケ嶽より流れ其下江犀川ゝ入其水流して松本に
西江京都江通る時ゝ小野村八左衛門羽七年ふ
備本澤 伊奈郡小野村の界なり
一名造家の時ゝ中に入る本武百姓を伐ることを禁ぜ
古来例ゝ小野村
駅長これを監ゝ
諏訪社 一村ゝ神を号ゝ永禄年間
生土神ゝ
観音寺 真言宗 楊梅山と号ゝ
大同元年田村将軍創建其後年久しく廢
元和二年郷豪
千村氏再建を

鷲着寺 曹洞宗 飛梅山と号ゝ
京良年長氣寺ふ屬を
押竜橋 尚駅の東路中にあり長サ十間本江架して梁〳〵
勢川四郎家光家 本谷 横沢村の四子なり此駅ふ居住を
ゝ氏と其後三尾村ふ居し改先て
二尾氏と
尾州侯ふ奉仕を
千村右馬つ尉後改家 本谷 横沢村の五子又郎家重上州千村
郷ふ居住し其所を領を
ゝ其十世の孫後改
居住を其子右馬つ尉改紹本谷義昌ふ屬し其後ふ笠系
奥慶ふ通して食邑江
長と称ふ其家に武田信玄の書一通小笠系奥慶の状
二通ふ義昌の状
を通を藏む
荻曽 小本谷 書ゝ義系の状あり
獵諸獸 鹿猪羊熊等 本谷ゝ中ゝ
荻曽 黒川 末川 西聖王 聽谷源 孟谷 甚多し
土産 絲綿 麻 又接骨藥 里人云一人 鯛鮒を捕ふ者あり接骨
の傷方と投得を極く奇効なり
五月 月橋 駅路ふあり 長七間

衣更着明神祠　本名山中菱村ふ衣更着の名基と類し後世民傳を云へり

例系八月

宗川　名を松橋村と稱す　府の屬邑之民兵

秀綱澤　會戦ふ秀綱を殺し駐の國司之十二里

黒川温泉　本名宗川　其土産の紀州の紀州

疾ひと高山に名を汲ぐ粥を煮て參人請疾を治れと

なり土人此名を汲ぐ粥を煮て參人請疾を治れと

山神祠　本名角平村ふ

祠司奏議　秀綱國城滅され出奔し此村ふ來りて一家を

栗の仮を作り　秀綱命を出して

城を攻る事　城主秀綱と　城主五郎八長強を討

城を知て　城の芝金城河中へ投て

迫を知て　城の芝金城河中へ投て

其後郷人何城ふ金の光あれど

宗城なし　郷人多く　狂乱し又剣業

怨れること　城主五郎八長強を討て

豊臣秀吉公　城主五郎八長強を討て

人の九光ふ殺さるとて　秀綱の軍敗走

桃大納言自國と　秀綱の代々九孫國の國司

ふ云へり　滅亡し

駕疲嶺　本名山中　黒川ふ至る路

山徑大ふ嶮岨なる　名

燒棚山　所の小ふ山に燒く時

農家ふ來り麻を績く業

助く身の長七尺許ある人より我頭ふ風

捕ふ則火着を燒く

を夾んく捨て山の燒山

武人亡ふ里老大ふ嘆し

と色を國ふ又一壺

樂去ふ山ふて酒と呑

其後燒棚と　今に至て山燒

燒棚と　今に至て山燒

糞作

山中　本名山中　黒川ふ孫

山農を業　黒川より又童觀翁

で紙　我ふ紙を松樹ふ

我ふ紙を松樹ふ

童觀翁の日　我ふ紙を松樹ふ

何ふも仙家の業

宅止紙近時　紙の業

今製の　紙の業

恐くも　其時　紙を

黒川本名　上掌に

燒棚と　墨と

小子墳　黒川の聖中に

其長七尺　其頭

相傳　本名殿庭ふ

小子墳　里民ふ

臼の中ハ原し又笠代屋ふに其形見へ其縁を半紙へ
設後るに葬ハ又其儀ふ長柱屋あるこ社ハ其家ハを
義む今ハ又ハ絵ふ着ハ怒ち爲と走ふ里人ハふ
恐れく敢て犯に半なり

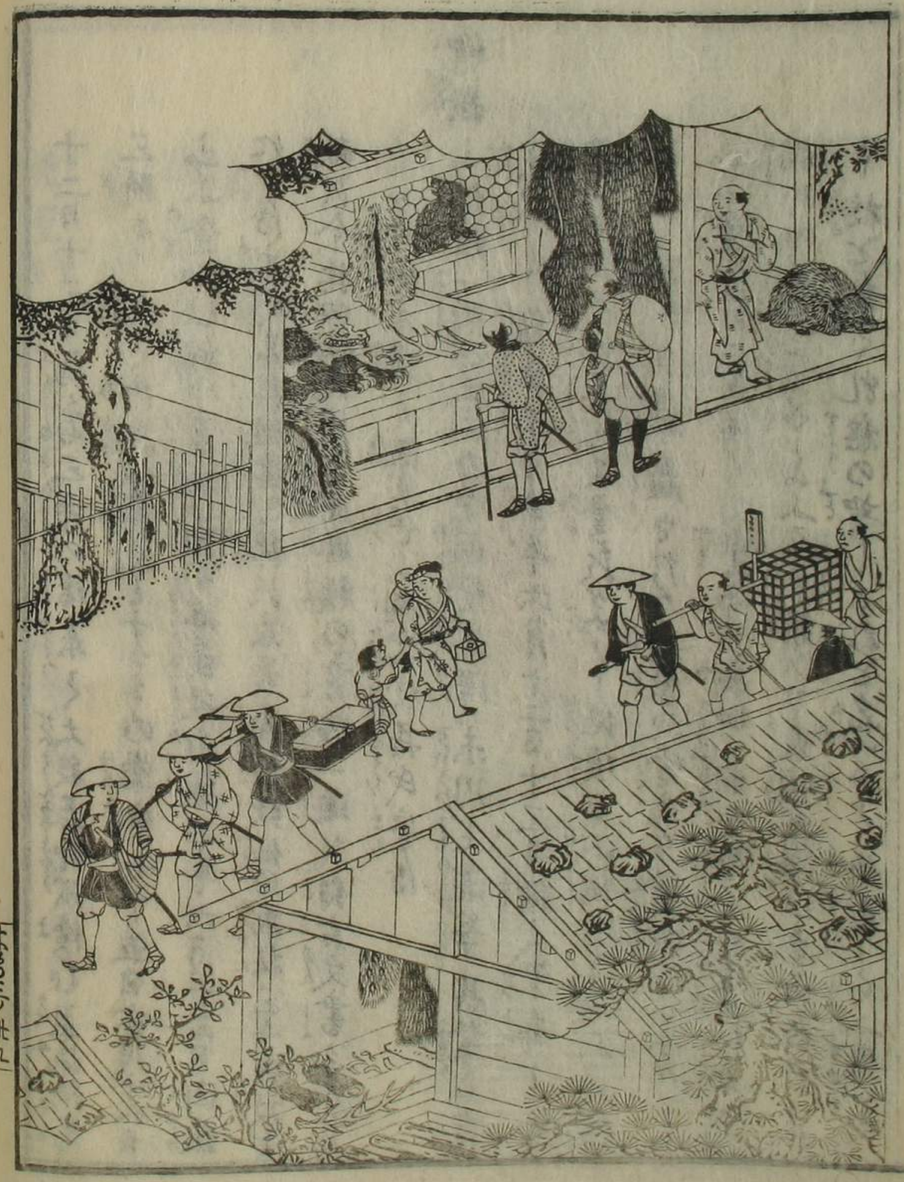
地渡澤 未川村ハなり地の古色基と思く其れも赤黒し古へ
村中男女ハ交ゞ毎年二月五日木綿を黒染ハ是
と為く男女殘ハく皆ハ綿を被をこ社を地渡祭とふ実ふ
古代の風なり今ハ半絶

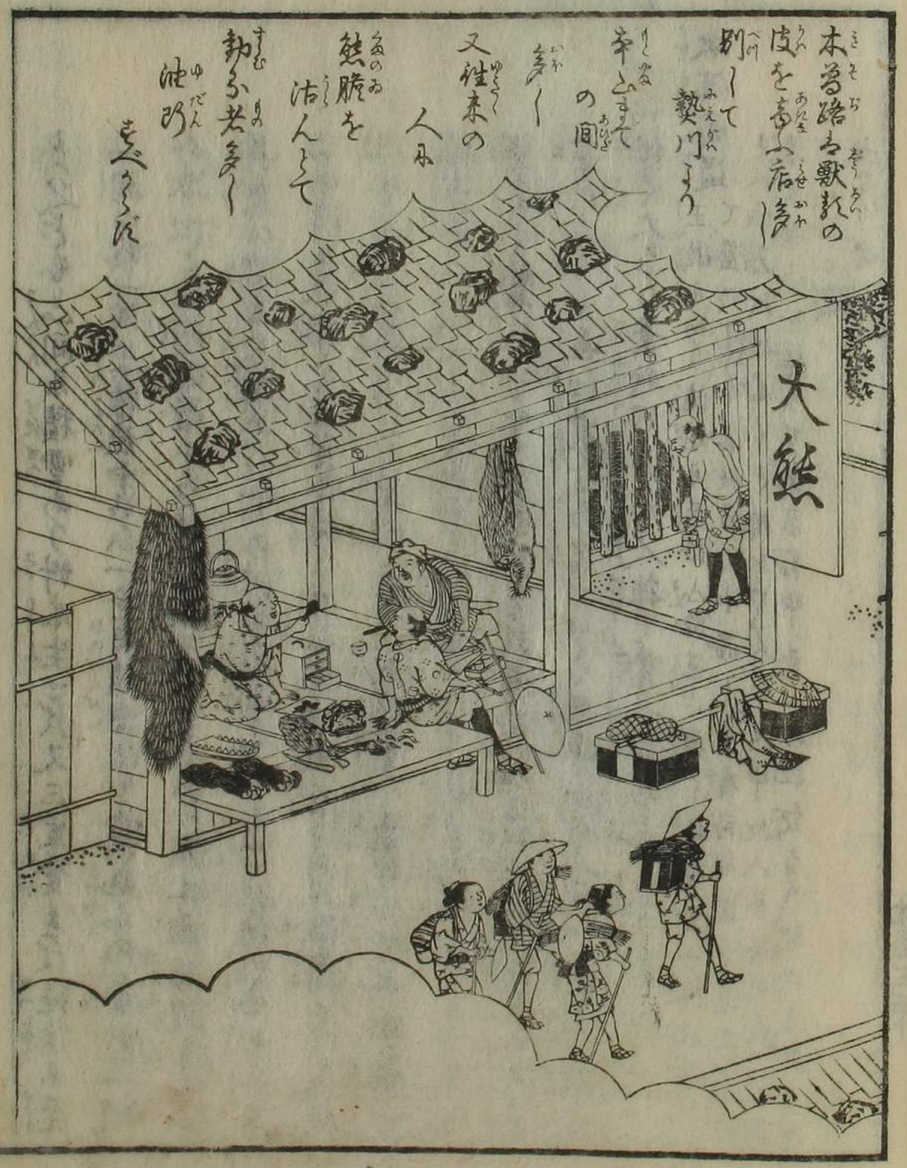
西野 本名ハ地名寒冷ハして五穀生せん已稗蕎麦のみなり七八月
に霜あ是ハ多く拓ハ民居ハ新も荒れ餘死る者
領主ふ有司来ハく鐵繩を施を半有尾州君の御領し
黒澤 本名乃ち中ハなり民居ハ間ハ数在に地御嶽の南ふ
して地温暖なを人多く住んで田地ハし坂小麦蕎の

御嶽 権現祠 黒沢ふなりれを 社橋 御嶽の祠ハ長サ
里の宮とふ 二十間本を架して梁と
に最大稀之 社若宮の二祠あり 桶安氣大蓋羅城安に延長三尺
頭庄至徳二年 本曽伊藤寺家信造営ん若宮を天文二十
三年本名左馬頭義康造営ハを彩殿 竪六間 横二間 讀経堂 竪五間 横三間
禮堂 竪八間 横六間 社禮堂 竪八間 横四間 寶藏 一宇 祭禮例年六月

十二日十二日福為三寺の僧来く大般若経ハ讀む且流鏑馬
三騎あり故く御嶽へ登んとするの潔齋七十五日六月十又日
ふ登ハ此祠の寶物本名源長政永禄三年六月十二日御嶽
に中ハ本牌ハ其姓名を録に本名義昌欲紀の画板三十六枚を
献に今其四枚失に武田勝頼の書翰一通其餘古文書多く有
しゞ洪水ハ遭く流去ふ祠宮武居氏守ハ

御嶽 ハ信濃一州の大山なを西麓澤。未川。王瀧等其麓ハ有
足沢ふり獨奉祀を毎年六月十二日十三日諸人繁森して
登ふ全く富士ふ登ハ登ハ絶頂ハ小祠ハり且三ツ池
ハりて其側巨巖直々たり四季に雪あり霊境とふ尾
ふ登ふに四里ハして堂あり夜中炬を照して峯に延ハ
祠ハり金剛童子とふふ懸ひて天明祇侍ハ亀五松松声
しゞ枝を垂く乳龍の如しこれを名づけく御松とふ盛夏




木曽路の獣肉の
皮を剥ぎ
別して
熟門する
の間
又往来の
人も
魅腔を
沽んして
動ふ者多し
池田
大熊

とつくども山間ハ積雪あり艸木生せズ又三里登ればズ絶頂ハ至
二洞ありて一ハ王権現やしろ一を日権現とゝ其西ハの峯に三洞
あり一を俱利迦羅とゝひ一を八王子とゝひ一ハ土祖権現とゝふ
其東の峰ハ二池あり一ハ池ハ水湛ゝ西ハ小流る其小ハ地獄谷とゝふ硫黄多く渓
川ありて王滝ハ流る濁川とゝふ是硫黄の氣にして其水甚ゞ
嗅毒なり又山上ハ鳥あり死鳥のゆゝ毛爪雌雄のごゝ一人を
見るも驚ゝ山上ハ一草ハ生ズ葉蘆蕪ハ似て小花咲く狀菫
葉ハ似ゝ大なり葉軟にして里人採て吟ふ花を御菜とゝふ
氷湛周道 王滝ハ流る滝越ハ至て嶮しく絶壁数十仞水流し
蓋の如く仕来りて名ゞ横橋を造て山路
傍ハ欄干を作りて実ハ谷中第一の壯観なり駅次ハ非ざる
少人見る能ハず

土産十一鳥 本谷中にみかこれあり形陽鳴のゆゝ 鳴声十一と
ゝ 猿ハ名ゝ 猿ハも亦多くこれあり
諸獣 猪鹿狐霊羊多ゝ山ハ
常に雪を侵し入る備獣ハ
然皮いゝ へゝ貢ゝ本谷の山谷ゝ
うゝび ハ膳を献ぜ金ハ賜ゝ年差ひなり
山神猫子 本谷ハ山ハ頭栗蕨ハ
色あゝひ白くなるひ白ゝ
麻のごゝく斑文あり脚黒し人を見ゝ
群ハ十月初雪の後山中の尾舎ハ入ゝ
殺ゝ捕ゝこれを捕ゝ
岩戸権現祠 王滝上流 岩間ハ洞を建清泉岩壁ゝ涌出源ゝ
にあり
ゝて絶ゝ祠宮伝云是御嶽の別宮ゝ毎年六月十八日諸人
御嶽ハ登ゝ時祠宮導ゝを文亀永正天文弘治永禄等の祭文
あり又御嶽の縁起一巻なり天正二十年三月中ゝ書ゝ天正
の年号ゝ十九年ハゝ羅所謂二十年ゝ暦候ゝ也思ゝ
むゝ御嶽の鳥居ゝふゝ地をゝ入ゝ今ハ鳥居
原とゝ

本曾殿墓 二沢ゟ里人其名伝ちゑ共本曾殿ゟ〻これい本曾左
衛大夫義元苗孫の國司ゟ合戦ゟ〻終て軍敗まて命伝
隕ル即此墓形ゟん歟

權守兼遠墓 二條ゟ古石碑婆なんにいゞまの人歟ゟ〻漬と建る
其由緒詳ゟ山下ゟあり本曾左衛左衛大義元苗驃軍
崩越古城 二條の後ゟ山下ゟ拒む要害の遺址なりて王滝ゟ登る路あり
城拒む本曾の小にあるゟ〻
三浦 山本曾の小にあるゟ〻三國の界なり
濃列 飛列 信列 三列
此山ゟ沛嶽の東ゟの林麓ゟ登る榜ゟ坂ゟ〻ゟ〻ゟ終て一峯
ゟ〻ゟ名付て物殿せゟ〻ゟ〻遥ゟ沛嶽の西殿あゟ〻と云
又高嶺ゟ登まゟ飛濃信三列の界なり標を建て誌を建ゟ
山坂下ゟ八町ゟ〻て一塔橋ゟ芝九候の勇一なり其下平
洞ゟ水無澤ゟ〻ゟ〻又高岩ゟ除む巨巖あり烏帽子岩や
ゟ〻これを登まゟに方條変歴ゟ〻を見へゟ駿河の富士嶽ゟ見
白山ゟ辛ゟ絶なり勇六候ゟ至れゟ洞あり琴沢ゟ〻又板屋

あゟ〻ゟ須ゟ所ゟ已ゟ〻て高嶺ゟ登まゟ其間の山路岩石截〻
て径をゟ〻榜を架して磴をなん艱難辛苦して勇九候ゟ到ゟ山高
山高峻を極むゟ〻ゟ〻ゟ地平ゟ〻て大道のゟ〻ゟ〻ゟ紙奥倉崖ゟ〻ゟ
則沛嶽の岬なり其路左高飛列ゟ属〻其上を飛列嶽と云飛騨川
ゟ〻ゟ出る其路の右高信ゟ属して絶子嶽ゟ〻其下に瀑布あり
勢を散じゟ〻ゟ〻歸ゟ百間激ゟ〻是王滝川の源なり下流ゟ本曾の
大河ゟ流合ゟ其上の嶺石壁屹立易ゟ〻ゟ激ゟこれを登まゟ飛信れ
界ゟ〻ゟ至ゟ凡勇一候ゟ勇九候ゟ〻ゟ行程弦十里拙夫の道ゟ
遵ゟ〻ゟ下ゟ白若ゟにゟ〻ゟ其西岸即本曾王滝山なり其東の岸
坂中二浦ゟ〻ゟ一の板屋なり征ゟ舎ゟ〻ゟ里人云む〻三浦を夫と
〻者あゟて兩望して〻ゟ〻ゟ岳ん拙れゟ〻ゟ寒若ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ
岳坂激越ゟ橋ゟ〻ゟこれゟ〻ゟ自若ゟ至ゟ〻ゟ激越ゟ坂ゟ凡百間激ゟゟ
自若ゟ至ゟ〻ゟ行程又十里許山中廣大なり山山中に良材あ〻

挺本細くして樹あり葉極て小さく俗これを都賀と云又一種あり葉細
みて背白く毛を生じて竹のやゝ弱く裏白挺と云俗これを白比多
と名づく又一種あり細葉ありて齊整なり古昔尾挺也と号く
俗に唐檜と云て雅自本基小可なり又一種あり葉細小にして深き
その所阿羅を本と号く又新羅松及び五粒松多くは葉櫻小似く
洞〻樹の皮まゝ味ひ若く俗にあれと青苔古と云に其本を伐て薪
とすれば小つゞく乾ざるよりは雅獣小猟所獸を追ふに雲伐侵して山に入
時に本を伐て焼火とす〻寒を凌ぐまゝ樺本なり則本州にて伐
載に其皮炬とす〻こと所に鸕鷀炬也号く蓋これを焼〻あるに入くも
減に故小藉を使ふものの殺に炬を焼よく如と照して漁をなす可し
又白樺と名ばくるものなり其皮重なり為く剥とれる紙のごとく
炬燭小可なり又樺の本より似るものなり皮為く本理あるこれを
水茅と云ふ　杖小製ぶ〻又靈寿本とも云あり即本州小載に

俗小色深也号く紫陽小似て亜細長〻竹のやゝ赤実伐俗ぶ
○比山小小島あり巣城なり離を生じ鷸鷄のやゝ甚ぐ多〻又一種鳥乃
軒鶴のごとゝ灰黑色古人俗で涼ぶ鳥と云ふ是本州より所渭山鳥なり又
御嶽蚕樹の地小多なり所雑の如〻朱冠青趾羽色黑白相間る其名を
鶴と云似〻樓を出く雲中にあり人見る事小かなり
○三浦を支の宅中三浦山小なり里老相傳く云和田合戦の時其族多
小逃く居小其後流越小移小今に至りて流越村の百姓云小三浦氏也
称に云稀代誹りて三年祷と云猶三浦の字を書に東鑑小和田義盛
戦ひ敗〻て首を授く比時一族云小対九に只朝比奈三郎泰秀甚後の所
伐之〻に泰秀の母也巴女なり比女本多兼遠ぶ女〻して泰秀に其小縁之
御小ばこゝ小逃居とるも知れゞゝ流越の百姓兼遠を犯して地を神〻
と云に三浦を支の墓中三浦山の中小あり古樹多く墳小あり是和田義盛
の族建る所なり逃くゝ小居とる事明〻頗其子孫力なりある時芝流四

洗馬
真福寺
武士の墓むれ
桔梗
梗
原
宇万伎
真福寺
本堂
神明
赤陽社

義仲
馬洗水
楊柳
芭蕉塚
芭蕉古屋
芭蕉旧跡

小郷ハ行其里人大岩を脚夫六十人ばかり担ひ拾ふ程にて拾ひ上げ其夫其ふ沢余り肩を架して進く里人大ふ駭く且大木抜折く杖とし木
多小屋ハ又馬と負く山を越る事漸越て見る所の地の勢力朝比
奈三郎小あ沢して進んあ小屋を見変して疑ひうべ
山一條を領主の有司木曽の山中巡撫のありもんと
其木曽誌を省略し且木曽路駅路小路しのをを
都て落合の駅より武驛まで廿一里あり波蘇の山路ハて崖
路桟道多く艱難幸若の路中なり熟川より柿本村中畑若神
ふ。片平。小橋沢大那本。大橋沢ハ本曽路の界こ小標本有
西ハ尾別沢領東ハ松本領なり此所を勝橋とふ大橋沢の
上ハ千足原とふ所あり此ハ本曽義仲多く馬牧飼し所
なりと幾度尾沢より橋なり右ハ観音堂又岡の森の中に八幡
宮の廟一弦なり幸山ハ

本山（信濃）

洗馬まで三十町西の入口小橋あり川左ハ流る此も木
曽山より流れ出る本曽の幸若ハ右ハ
幸山観音堂幸山の駅の西口ハあり信列巡礼所廿一番ハ小沢川を西へ
橋あり長サ十間橋ハ本瀧大神の鳥居なりこれを遥ハをれと人煙
片ハ中ハて又ハ新樹程ハ陽たひ小踈し東ハ西ハの
宿ハみな知ハ小あ沢村南村小沢ハて洗馬の駅ハ
堀尾まで一里三十町ハ所より越後高田ハ三十三里
信列河中瀧ハ十一里松代ハ十六里ハ

洗馬（信濃）

義仲馬洗水右因信ハ此ハ洗馬ハて洗馬の東ハあり
東鑑云
治承四年十月十三日木曽冠者義仲
尋亡父義賢主之芳躅出信濃国入上
野国仍住人等漸和順之間為俊綱
利太郎也雖煩民間不可成恐怖思之

由加下知云云

善光寺別道 洗馬の東にあり

桔梗原 洗馬と塩尻の間にあり道傍の里に的ヶ原麦畑あり信玄の先陣敗北の古戦場と称す

桔梗原軍と云

無外の噺 小笠原氏と武田桔梗原合戦あり

信玄紀

武田信玄の嫡子武田太郎義信甲府を発馬あり小笠原家と攻亡

さべしとて木曽路へ押を手向かわく桔梗原に押出ひ小笠原先備其外

左馬の尉飯富三郎兵衛尉其外馬場内藤春日三枝五頭右兵衛小進

既に桔梗原にうち出まべ籠城せんと後陣の勢ひ塩尻城にうち城に

大腦を支長時を一家に同治部大輔奥平刑部大輔以下三千騎人を

指向られ武勢五月六日已刻桔梗原に陣出く既に鉄炮を打掛る程社あま

互ひに陰に入まく退かしつ相戦ふ小笠原弦員く六百七十九人討死し

て源志をうて引退けば長時ちひに怒く軍勢度々叫く其勢四千人貫人

桔梗原に押出し望七日の卯刻より戦を始く敵味方馳合を指翼に平

奥鑓に閑汗馬東西に馳違ひ錐旗南北に入乱く防ぎ戦ひ分捕を喧

百千の雷の一度に落るかと思へば中間の小笠原勢を今日城限とおもひ

定し事なれば切進ぶも鍛ぶも弱らばまた味方に手負死人を踏ませ

つ進先に進るこれ程の武威強大なぞ成ける

武田軍記抜粋に見るべし

信濃 塩尻

下諏訪へ三里塩尻峠より西に松平領なり此所より四里あり

松平丹波守度の領地六万石信州に間廣き平原の地

なり氏重の子ゆみ弦後の方へ添ふ又松平仁科を通く

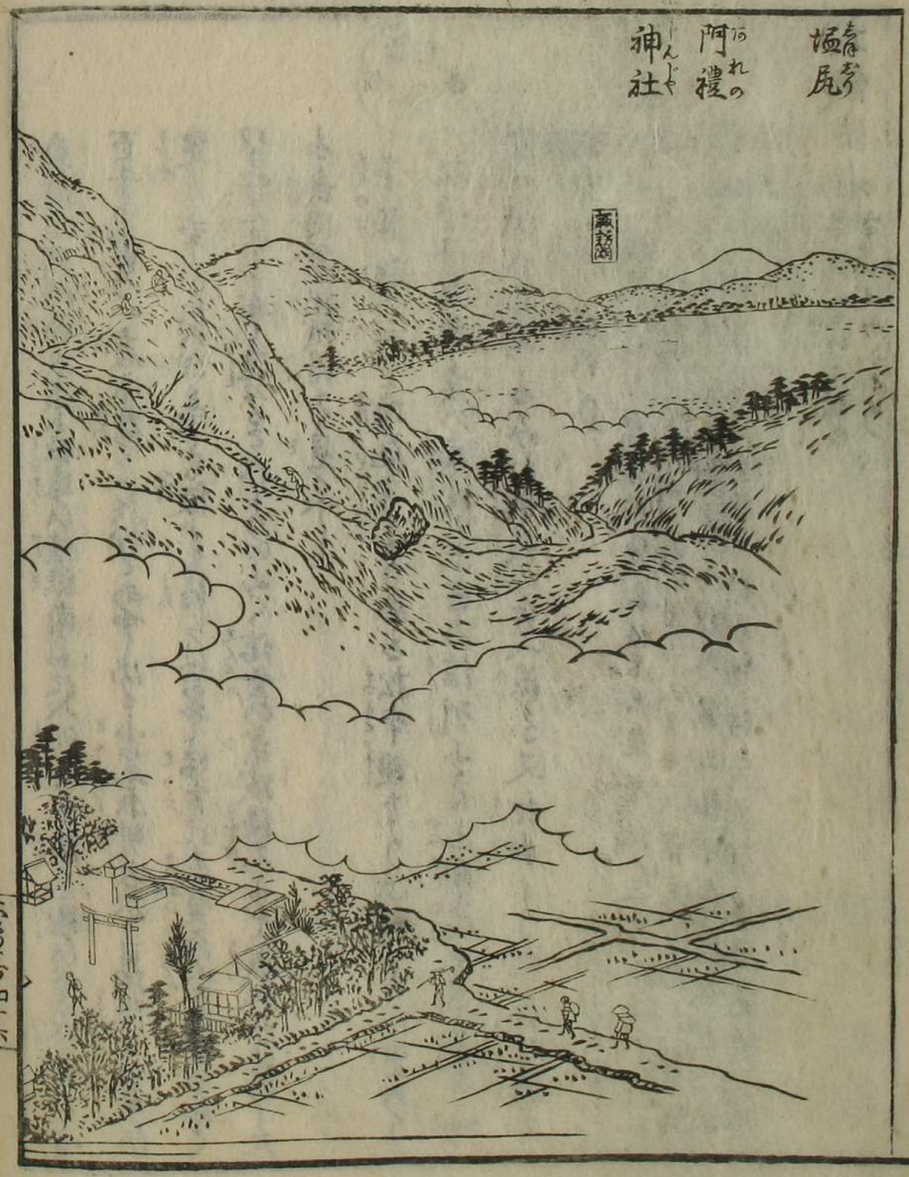
越中へ行道あり

阿禮神社 塩尻小なり延喜式神名帳に云ふ筑摩郡三座の内の大門村

荒神 庚申 平敷 宿場 香居 社 白髭 本社 八月十六日今八幡宮と称し

平敷日 宿場 ふ安 半頭天王 疱瘡神 諏訪 多賀 鷹瀬 龍田 松尾

犬飼清水 塩尻嶺の西坂の麓にあり



本者三ノ四十六

塩尻峠

塩尻と下諏訪の間なる峠なり二里登る峠ようの
何果と指授ありしより出でく此峠あるく甲州勢と
信州勢とが合戦ありしなり

塩尻軍記

武田晴信翌日卯刻小塩尻峠に至りて敵味方間を揚るや否や抜き
合せて切て入陣に合せ追崩しぬ立直しあれ登度と勧めさうされども
敵は支戰なり味方は長途に労れ其上一番宿陣の敵兵小味方僅小
六千にして相戰へば甲兵大小労れ果てくたびれ晴信
屑ともせず旗本に横入あり七頭八倒して戰ひ四方に或い
馬上あり或は徒で或は肩を並べ或は或は
疲れども晴信自兵に麾き軍卒に励しめ敵兵追崩され
足並四度路よりあるに敵軍の中より武田菱を染出せる馬小
乗てる武者指物を切形を仰慶あり陣を切て
晴信の右の股を突てこれ突所を晴信其侭あり陣の籍乃員に揚を
なまじ駆ぬ体にて下諏訪方に尉馳来り其武

者に馬より逆ふ引落し押へて首を取れば敵軍大ひに
乱れ立て熱軍悉く敗走に信州の三将の内ご着陣せざる間ろ
雲合の集り勢三千ばかり小一手切乃人数にて
ろ兵に捨子ろ親を顧ず体を上ろ小迎逆を追詰ろ討捕小頁を
卒八百七十二級ろり晴信の思慮に依ふ小おしも遠に安ろ敵を追
崩し軍場大小勇あり諸卒拾貫に中小小山田平次左つが
働き他小異として則感状を下されける

今十九日卯刻信州塩尻峠一戦之仰頸一ツ討
捕象神妙之至作弥可抽忠信肝要也仍如件

天文十七戊申年七月十九日　晴信

小山田平治左衛門尉殿

晴信ろ河中嶋小陣所あれども敵一騎も来ざれば十月十日
甲府小帰陣し給ひろ当河中嶋軍記小ろり詳て見るべし

清間祠嶺ハあり高居村此所より富士山見へたり故ハ社あり

大岩

塩尾を立く桜沢村こゝハ前塚あり此亀古墳場なり長坂芝の

茶屋城あるく塩尾嶺ハ登ハこゝ稗こゝ右ハ富士峯

見へる又諏訪の湖高嶋の城など解みて白ッ屋ハいとゝ芝見村

より蜂が岳をこゆる左の方ハいの字山見ゆる此所諏方嶺こゝも

いふ東堀村ハ板橋あり諏方の原といふ所也こゝ戸川よりこゝに

も板橋あり二ハ長サ十間許左の方ハ諏訪其の辺四面通ハ

高まべたばこく遠望こゝ下諏訪の駅よりこゝ旅舎ハ泊ル

本曽路名所図會巻之三終